

富山県小杉町・大門町

小杉流通業務団地内遺跡群

第7次緊急発掘調査概要



1985年3月

富山県教育委員会

序

小杉流通業務団地の建設予定地は、数多くの著名な遺跡集中地として知られ、造成に先立ち、これまでに、7年次にわたり調査を実施してまいりました。

先の調査では、No21遺跡から北陸地方最古の瓦陶兼窯跡が発見されると共に、須臾器や瓦の生産を行った工人の聚落跡が明らかになりました。この遺跡は歴史的重要性が考慮され、現状のままで保存することを前提として、瓦陶兼窯跡や集落跡等重要部分について覆土工事を施しました。

今年度は、No21遺跡周辺の詳細調査の一環として、丘陵裾部の調査を実施し、弥生時代の採土穴と考えられる多くの遺構が発掘され、これらは、今後、周辺の遺跡との関係を明らかにしていく上で貴重な資料になると思われまます。本書は、その調査の概要をとりまとめたものでありますが、多くの方に活用され文化財保護の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、地元をはじめ関係各機関の数多くの人々の協力をいただき、厚くお礼を申し上げます。

昭和60年3月

富山県教育委員会

教育長 國 香 正 道

例 言

1. 本書は、富山県射水郡小杉町・大門町に所在する小杉流通業務団地内遺跡群の第7次発掘調査の概要である。

2. 発掘調査を実施した遺跡名と期間・面積は以下のとおりである。

No21遺跡、小杉町青井谷字丸山所在 昭和59年9月10日～11月26日 約3,400㎡

3. 富山県教育委員会が詳細調査の一環として（第1期）調査を実施した。

なお、調査の実施にあたって、文化庁記念物課主任文化財調査官河原純之の指導を得た。

4. 発掘調査担当者及び調査員は以下のとおりである。

調査担当者 富山県埋蔵文化財センター主任上野 章・同岸本雅敏・文化財保護主事関 清・同斎藤 隆

5. 調査事務局は、富山県埋蔵文化財センターに置き、主任出村昭夫・文化財保護主事池野正男・同酒井重洋が調査事務を担当し、所長前田英雄が総括した。

6. 調査から報告書の作成まで下記の方々から種々有意義な指導・助言を得た。記して深甚なる謝意を表したい。

秋山達午・安念幹論・磯村朝次郎・伊藤隆三・乙益重隆・工藤利幸・小島俊彰・斎藤 進・淡谷昌彦・中村五郎・西井龍儀・林 浩明・麻柄一志・和田晴吾（五十音順・敬称略）

7. 本書の遺物写真は3分の1を基本としている。遺物写真の番号が2段階組のものは、下段が実測図の番号を示す。

8. 遺物の写真撮影及び整理にあたっては、橋本正春（富山県埋蔵文化財センター）の協力を得た。

9. 本書の編集・執筆は、調査を担当した上野 章・岸本雅敏・関 清・斎藤 隆が共同で行った。

目 次

<p>I 地形と周辺の遺跡…………… 1</p> <p>II 調査の経緯…………… 2</p> <p>III 調査の概要…………… 5</p> <p> 1. 調査の経緯…………… 5</p> <p> 2. 立地…………… 5</p> <p> 3. 層序…………… 5</p> <p> 4. 遺構…………… 8</p> <p> 5. 出土遺物…………… 11</p> <p> (1) 弥生時代の土器…………… 11</p>	<p>(2) 古墳時代以降の土器…………… 21</p> <p>(3) 木製品・種実遺体…………… 22</p> <p>6. まとめ…………… 27</p> <p> (1) 採土穴について…………… 27</p> <p> (2) 弥生土器について…………… 28</p> <p> (3) 木製品について…………… 32</p> <p>参考文献…………… 34</p> <p>写真図版</p>
--	--

挿 図 ・ 表

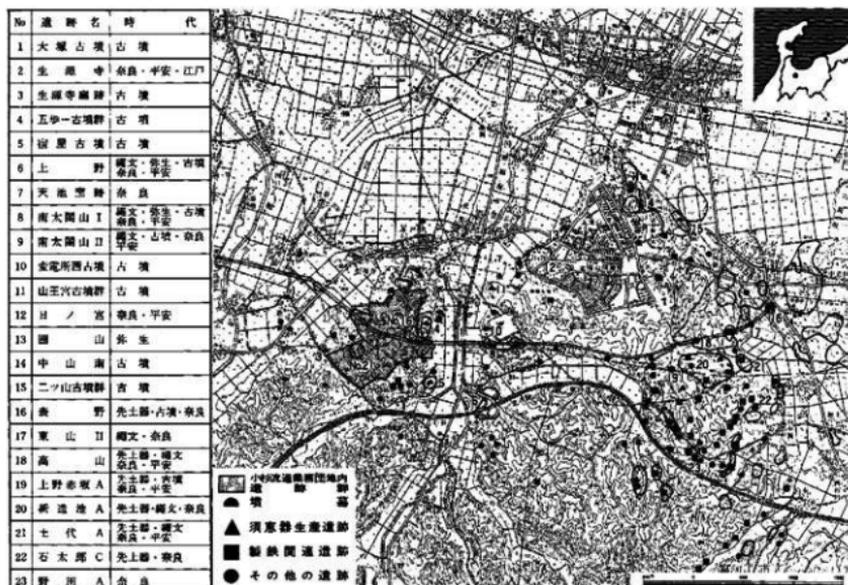
<p>第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡…………… 1</p> <p>第2図 小杉流通業務団地計画地内及び周辺の遺跡分布図…………… 3</p> <p>第3図 上層断面図…………… 5</p> <p>第4図 No21遺跡の地形と区割図…………… 6</p> <p>第5図 遺構全体図…………… 7</p> <p>第6図 遺構全体図…………… 折り込み</p> <p>第7図 出土遺物分布図…………… 折り込み</p> <p>第8図 58年度調査区出土遺物状態図…………… 9</p> <p>第9図 近界の橋描波状文…………… 9</p> <p>第10図 木製品出土状態…………… 10</p> <p>第11図 土器の垂直分布図…………… 10</p> <p>第12図 出土遺物実測図…………… 13</p> <p>第13図 器種分類図…………… 13</p> <p>第14図 出土遺物実測図…………… 14</p> <p>第15図 出土遺物実測図…………… 15</p> <p>第16図 出土遺物実測図…………… 16</p>	<p>第17図 出土遺物実測図…………… 17</p> <p>第18図 出土遺物実測図…………… 18</p> <p>第19図 出土遺物拓影図…………… 19</p> <p>第20図 富山県内出土天王山系統の土器…………… 19</p> <p>第21図 出土遺物実測図…………… 20</p> <p>第22図 鋤部位名称…………… 22</p> <p>第23図 出土遺物実測図…………… 24</p> <p>第24図 出土遺物実測図…………… 25</p> <p>第25図 出土遺物実測図…………… 26</p> <p>第26図 粘土採掘坑掘削模式図…………… 27</p> <p>第27図 No21遺跡と関連遺跡…………… 29</p> <p>第28図 主な採土穴…………… 30</p> <p>第29図 主な採土穴…………… 31</p> <p>第30図 No21遺跡と関連遺跡出土の遺物…………… 33</p> <p>表 1 本調査結果一覧…………… 2</p> <p>表 2 出土種子一覧…………… 23</p> <p>表 3 主な採土穴一覧…………… 31</p>
---	---

I 地形と周辺の遺跡

射水平野の南部にあたる、金山(射水)丘陵に小杉流通業務団地内遺跡群が位置し、その行政区画は射水郡小杉町同大門町に属する。

この丘陵は、新世代第3紀の泥岩・砂岩層によって構成されており、和田川・下条川等、その支流が谷を刻み樹枝状の地形を呈し、丘陵北部の日高互層の粘土は、良質で瓦(現代)の原料となっている。丘陵は水が得にくいため谷の入口を閉め切って溜池がたくさんつくられている。東部に連なる呉羽山丘陵と、共に各時代の遺跡の宝庫とも言えるが近年、当城周辺に於ける大型開発事業等の増加に伴い、自然環境は目まぐるしく変化している。

周辺の遺跡分布を見ると、上野遺跡・團山遺跡・中山南遺跡・大塚古墳・山王宮古墳群・生原寺窯跡等が著名なものとして知られている(第1図)。下条川の左岸(沈田遺跡群)、同右岸(太閤山側)での遺跡の様相は趣を異にしている【神保 1984・関 1984】。沈田遺跡群を概観すれば、以下の如くなる。先土器時代—5箇所確認されているが、ほとんど遺物の単独出土の状況を示す。縄文時代—10箇所確認され、遺物としては前期—後期の土器等がある。遺構としては中期前半の住居跡、穴等が検出。弥生時代—柳桶文土器、天王山式土器が少量。古墳時代—5～6世紀代の円墳、6世紀末～7世紀初頭の窯跡、飛鳥—白鳳時代の住居跡(竪穴式と掘立柱)瓦陶兼窯。奈良時代—須恵器窯、住居跡(竪穴式でカマドの有・無の二種)掘立柱住居、奈良—平安時代の炭焼窯と以上の如くである。その他として付近の水田地帯は隠田に分類され【富山県 1973】水田下遺跡の存在も考慮される場所である。主に原史時代以降、遺跡の増加が見られ、7—11世紀にかけての須恵器・鉄・炭が生産され続けており古墳・集落を含めそれに関する遺跡が数多く残されている。(斎藤)



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

II 調査の経緯

事業経過 昭和48年度から、富山県が事業主体となる大型プロジェクトの一環として、小杉流通業務団地計画（トラックターミナル）を策定した。この事業は流通機能の向上と道路交通の円滑化を図る目的であり、北陸自動車道・小杉インターチェンジの北西約1km、小杉町・大門町にまたがる約51haの丘陵地を、24mコンターで削平し、土地を造成して、路線トラックターミナル・区域トラック施設・倉庫・卸売施設等を配置するものである。造成事業は昭和54年度より開始され、第1期から第3期工事に分割し、順次進められている。現在のところ予定地面積の70%程度が完了し、一部の分譲がすでに開始され、構築物が並び創業されている。

分布調査 富山県教育委員会は、工事計画の実施に先立ち、昭和51年12月に建設予定地内遺跡分布調査を実施し、調査対象地内計28ヶ所を、奈良～平安時代を中心とする集落遺跡・生産遺跡を確認した。しかし、調査対象地が主として畑であり、大部分の雑木林等で十分な調査が実施できず、今後さらに別の遺跡が発見される可能性を示唆する結果を得た〔富山県教委 1977〕。これらの結果をもとに、土木部・土地開発公社・教育委員会の三者による事前協議を重ねて、昭和52年から同58年まで6次にわたる発掘調査事業を行い、これまで18遺跡4地区の本調査を実施した（第2図 表1）。

年次調査の成果（ただし第6次調査まで、遺構の数等は表1参照のこと）

第1次調査（昭和52年11月～昭和53年12月）

建設予定地内の代替地造成に係るNo20遺跡の発掘調査であり、2回の予備調査をへて、丘陵上半部の記録保存調査

年度	遺跡	所在地	時代	種類	主な検出遺構と出土遺物
1次 53	No20	小杉町青井谷字丸山	先土器・縄文・弥生 奈良(主)	集落跡	住居跡3・段状遺構1・穴18
2次 54	No9	大門町水戸田字石名山	縄文	溝1	
	No13	小杉町青井谷字丸山	奈良	環状遺構1・穴13	
	No16	大門町水戸田字石名山	縄文・古墳・奈良(主)	集落・竈跡	住居跡1・須恵器甕跡2・段状遺構1・穴9・須恵器
	No17	"	縄文・古墳(主)	古墳	埋葬1・円墳1・木棺墓1・穴5
3次 55	No18・A地区	小杉町青井谷字丸山	奈良	集落跡	住居跡1・穴5・溝5
	No3	大門町水戸田字石名山	縄文・古墳	集落跡・古墳	住居跡1・円墳6・穴6
	No7	"	縄文・古墳・奈良・平安	集落・竈跡	住居跡27・円墳4・須恵器甕跡7・独立柱建物7・穴・溝多数・須恵器
	No18・C地区	小杉町青井谷字丸山	縄文・奈良(主)・平安	集落・竈跡	住居跡2・円墳1・穴・溝多数
4次 56	No20・B地区	"	縄文・古墳・奈良	穴2	
	No32	"	先土器・平安	竈跡	炭灰燻跡2・穴2
5次 57	No2	大門町水戸田字石名山	"	穴2	
	No3	"	縄文・古墳	集落跡・古墳	住居跡2・円墳1・穴13
	No6	"	先土器・縄文・古墳(主) 奈良・平安	集落・竈跡	住居跡14・溝・炭灰燻跡1・穴多数
	No7・北地区	"	縄文・古墳・奈良・中世	集落跡・古墳	住居跡3・円墳4・穴多数
6次 58	No1	"	縄文(主)・奈良	穴2・縄文土器・石片・須恵器	
	No11	大門町水戸田字石名山	先土器・古墳・古墳	古墳	円墳3・先土器時代の石器・縄文土器・剣・瓦片・鉄鍬・オケス玉
	No21	小杉町青井谷字丸山	先土器・古墳・白鳳(主)	集落・竈跡	穴多数・製鉄炉・先土器時代の石器・瓦・須恵器・土師器・製塩土器
	No23	大門町水戸田字石名山	奈良・白鳳・中世	製鉄跡	木製品
	No24	小杉町青井谷字丸山	縄文・奈良	穴14・縄文土器・磁石・須恵器・土師器	
7次 59	No26	"	縄文・古墳(主)・奈良	古墳	円墳1・穴1・縄文土器・石器・土師器・須恵器
	No16	大門町水戸田字石名山	縄文・奈良(主)	集落・竈跡	穴38・先土器時代の石器・縄文土器・石鏝・須恵器
	No21	小杉町青井谷字丸山	先土器・古墳・白鳳(主) 奈良～平安・中世	集落・竈跡	住居跡・段状遺構・須恵器甕跡1・穴・須恵器・土師器・土馬
	No21	大門町水戸田字石名山	先土器・縄文・弥生(主) 奈良～平安・中世	集落・竈跡	住居跡・段状遺構・瓦葺土器甕跡1・須恵器甕跡1・穴多数 炭灰燻跡・製鉄炉・先土器時代の石器・須恵器・土師器・瓦・土馬
7次 59	No21	小杉町青井谷字丸山	先土器・縄文・弥生(主) 奈良～平安	採土跡	採土穴多数、先土器時代の石器・縄文土器・石片・すり石・弥生土器(主)、木製品、須恵器、土師器、瓦

表1 本調査結果一覧



第2図 小杉流通業務団地計画地内及び周辺の遺跡分布図

を行う〔池野他 1979〕、奈良時代の住居跡等を発掘、まれな遺物として、さいころ形木製品があげられる。他、小杉町上野遺跡〔橋本 1972〕より規模の大きい段状遺構が確認され、作業場の機能が想定されている〔酒井 1979〕。

第2次調査 (昭和54年4月から昭和54年12月)

第1期造成工事予定区内と、隣接する13遺跡の試掘調査を実施、この内幹線道路に関連するNo.9・13・17遺跡とNo.16・18遺跡A地区の一部を対象として記録保存調査を実施した。No.17遺跡の1号墳は5世紀代に属する円墳である。No.16遺跡では古墳時代後期と奈良時代前半の須恵器窯跡各1基を発掘。他、段状遺構・穴〔探土穴〕も確認された。又東側半分で確認された須恵器窯跡・住居跡等は緑地帯として残る予定の為除外された〔上野他 1980〕。

第3次調査 (昭和55年4月～昭和55年12月)

第1期造成地に含まれる2遺跡〔No.20B地区・18C地区〕と工事中に見えられたNo.32・3遺跡の記録保存調査、及び第2期造成地にかかるNo.7遺跡の記録保存調査。No.3遺跡では縄文時代の住居跡と6世紀代の円墳群。No.6遺跡では古墳時代後期（6世紀末～7世紀）の住居跡等、No.7遺跡では5世紀後半の円墳群と古墳時代後期（6世紀末～7世紀）の窯跡群、集落跡が確認された〔上野他 1981〕。

第4次調査 (昭和56年4月～昭和56年11月)

第2期造成地にかかる4遺跡〔No.2・3・6・7北地区〕の記録保存調査を行い、後、第3期造成予定地にかかる6遺跡〔No.1・11・21・23・24・26〕の試掘調査を実施。No.2遺跡は出土遺物がなく、所属年代不明。No.3遺跡は縄文時代の住居跡、No.6遺跡は古墳時代の住居跡、奈良～平安時代の炭焼窯。No.7北地区は縄文時代の住居跡、円墳（5世紀後半）等であった。試掘調査の結果、No.21遺跡の範囲は約25,000㎡と推定され、丘陵上から西側斜面にかけて、遺構の密度が高く、弥生・白鳳・奈良～平安時代の遺構・遺物が確認された（須恵器・瓦の窯、炭焼窯・製鉄炉・住居跡・穴・溝等多数）。X30Y30区付近の東側谷部や、X10Y28区付近では性格不明の穴が多く点存するが遺物量は少ない、当地は流団地内でも最大規模で、瓦・須恵器・鉄生産・集落跡の多岐の内容を持つことが確認された。出土した平瓦は、叩き目等の観察等により、昭和57年初春（西井龍儀氏探査の結果）供給先が判明した〔上野他 1982〕。

第5次調査 (昭和57年4月～昭和57年12月)

第3期造成予定地にかかるNo.11・21・23・24・26遺跡が対象となり、まずNo.23・24・26遺跡が記録保存調査された。調査途中、第1期工事の施設整備の一環として青井谷丸山I遺跡等の試掘調査を実施。No.11遺跡の古墳群中の道路敷に含まれる3基を記録保存調査し、残り6基の古墳は保存を前提に調査が進められる。なお古墳の時期は6世紀後半である。No.21遺跡調査地区は瓦陶業兼推定窯跡の存在する斜面の下方、谷部の一角（1,800㎡）で記録保存調査を実施した結果谷に沿って西側に多数の穴が検出され、古墳時代と白鳳時代の2時期にわたる穴を確認した。後者の一部は、須恵器・瓦生産に必要な粘土を採掘した穴と推定された。遺物は先土器時代・古墳時代初期の土師器・白鳳時代前半の須恵器・土師器・製塩土器・木製品・瓦・奈良～平安時代の鉄滓・須恵器等である。軒丸瓦・平瓦が多数出土し、これらの分析の結果、供給先が明確となった〔上野・西井・岡岡・橋本 1983〕。

第6次調査 (昭和58年4月～昭和58年12月) ただし、No.21遺跡の記述はしていない。

No.16・21遺跡の記録保存調査を実施した。No.16遺跡の西側半分は、第2次調査で済み、すでに造成工事が終了している。当初今回の東側半分は緑地帯として現状保存の予定であったが、計画変更により、記録保存調査するに至った。試掘の結果通り奈良時代の窯跡が確認、その他探土穴、段状遺構等も発掘、しかし谷を隔てた対岸斜面の住居跡等は造成関連工事によって、すでに削平されていた（窯跡の前庭部も）。

今回特筆することはX-2～2Y24～27区付近の谷部より遺物が多量発掘されたことである。特殊な遺物として、土馬・舟形木器・鳥形須恵器・山面碗・杯蓋碗・漆の容器・管状土鏝・墨書土器である。分布調査の示唆が的を得た結果であった。

III 調査の概要

1 調査の経緯

58年度調査 記録保存調査約4,500㎡と表土耕土9,100㎡を行い、確認した遺構は瓦陶業窯跡・竪穴住居跡・段状遺構・製鉄関連遺構・炭焼窯・穴群・採土穴等があり、この内住居跡3棟・段状遺構2箇所・瓦陶業窯の一部発掘、灰層の確認、第2号窯跡の試掘確認、谷部穴群（採土穴等）を発掘した。

遺跡の協議等 58年3月（以下58年省略）文化庁主任調査官河原氏視察、8月県教育長・同社教部長等の視察、同月下旬富山考古学会の遺跡見学会 9月文化庁調査官黒崎氏視察、同月下旬調査担当者2名の県外窯跡保存の現状と調査に向く。奈良国立文化財研究所（以下奈文研と略）・奈良県五条市荒坂瓦窯跡・滋賀県大津市榎木原遺跡等、特に奈文研では軒丸瓦と須恵器を持参し、新知見の教示を得た。①須恵器と瓦は今までは、7世紀第3四半紀の白鳳前期と考えられていたが、更に古く7世紀第2四半紀の飛鳥時代に一部かかる。②瓦は北陸では最も古く奈良県明日香村の坂田寺の軒丸瓦の同系統に含まれ、この瓦は全国に事例が少く、畿内の氏族と北陸の氏族との政治的なつながりがわかり学術的にも重要である。10月県議会商工労働委員視察、同月下旬富山考古学会より流団No21遺跡の保存に関する要望書が提出される。同月下旬奈文研上原技官の現地指導と以下の知見が教示された。①古代日本の瓦生産は6世紀末～7世紀初頭に始まるが、現在7世紀前半の瓦窯は、すべて近畿地方にのみ発見され、北陸では初見。②工房跡・工人集落を伴う須恵器・瓦の生産遺跡は全国的にみて10指に満たない。③古代の瓦葺建築は、主に仏教寺院であるが、御亭角遺跡と流団No21遺跡は仏教文化の地方伝播と地方寺院の成立年代が予想以上に古いことを示す遺跡である。同月下旬流団地内分譲の折、県商工労働部長等視察、11月県議会商工労働委員視察、同月中旬県教育委員会で保存を要望、12月文化庁河原氏2度目の視察 59年3月初旬県議会で議員がNo21遺跡・御亭角遺跡の保存方法についての質問、同月中旬流団地内の遺跡公園の協議が持たれる。

59年度調査 No21遺跡の詳細調査の一環としての事業が開始され、作業の工程上、2期にかけて調査することになり、本年はX23～46Y29～39区の範囲である。56年の試掘調査結果が示すように、採土穴等が数多く発掘された。あわせて58年表土耕土区が、露出による遺跡の自然崩壊や流土の防止をするために盛土（約30cm）工事を11月より実施し遺跡の保護・管理に万全を期した。

2 立地

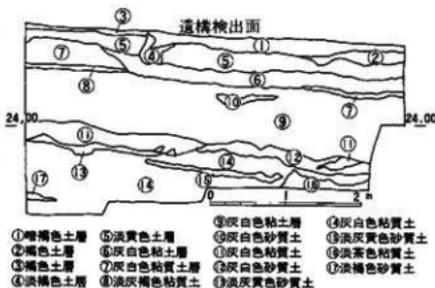
調査地区は、瓦陶業窯の東側に位置し、標高21～30mを測り南に向けて低くなり、以前は雑木林であった。

3 層序

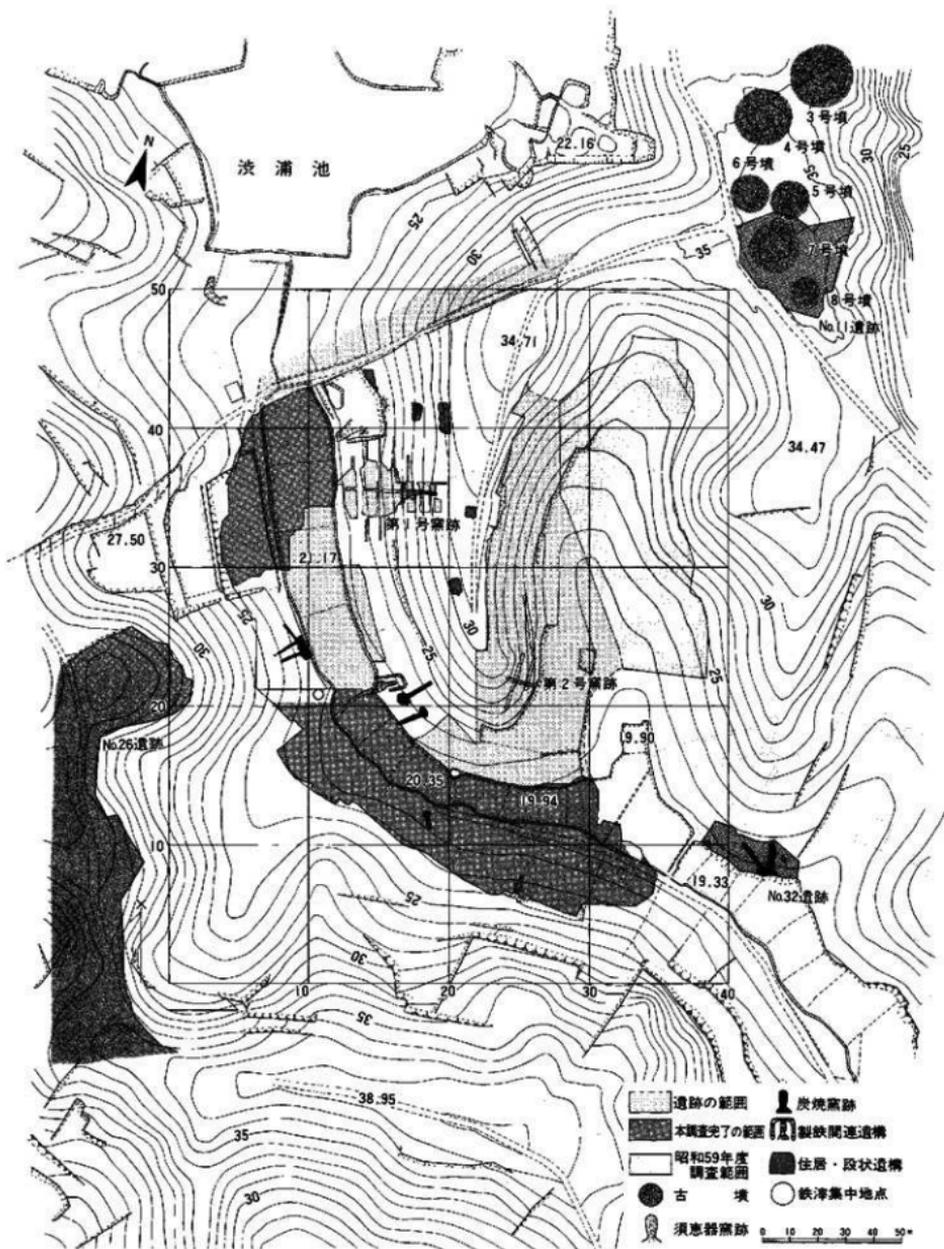
調査区全体を重機により表土・黒褐色土層の排土を行う（試掘調査の結果に基づき）。土層断面は南北20m間隔で東西に4箇所設定とともに遺構発掘終了後、粘土層の為、深掘を9箇所設定。①X45Y35区（以下X-Y略）②41-35（第3区）③34-33 ④31・32-31 ⑤31・32-32 ⑥30-33 ⑦30-34 ⑧27-36 ⑨26-35・36であり、深掘の土層を比較すると、②では遺構検出面より灰白色粘土層まで約50cm、③では遺構検出面より約30cm、同様に⑨では約20cmである。北東側に向うほど、灰白色粘土層までの厚さが加算される。

（斎藤）

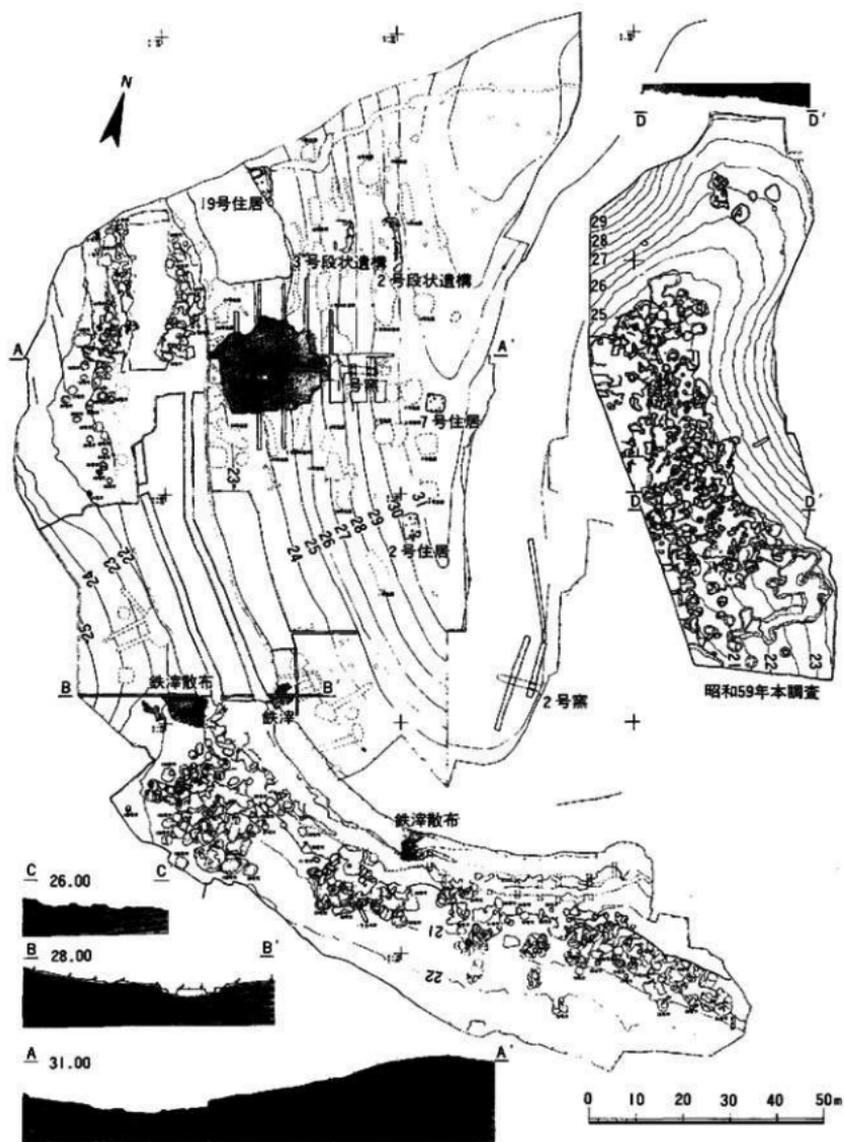
X41Y35区東西セクション北面



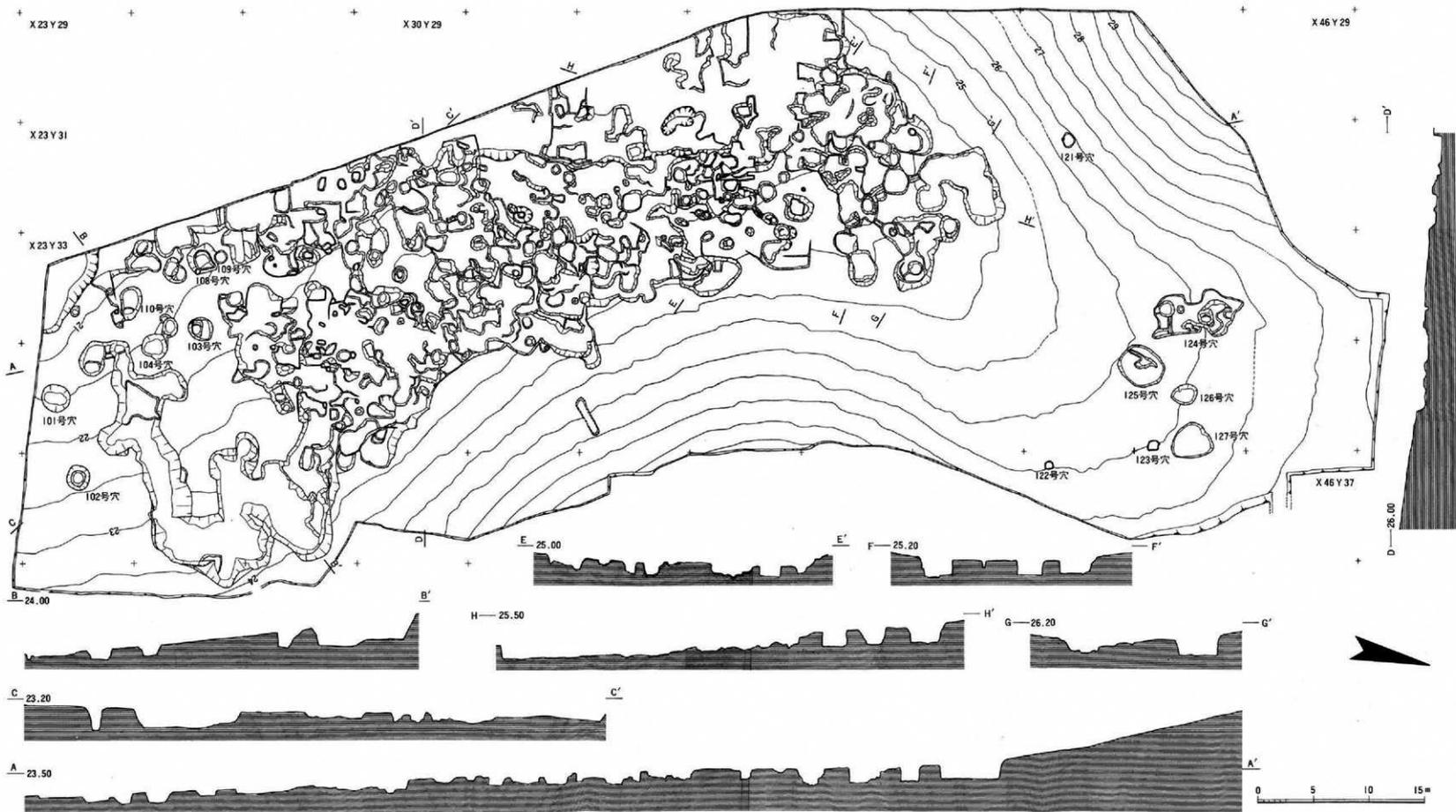
第3図 土層断面図



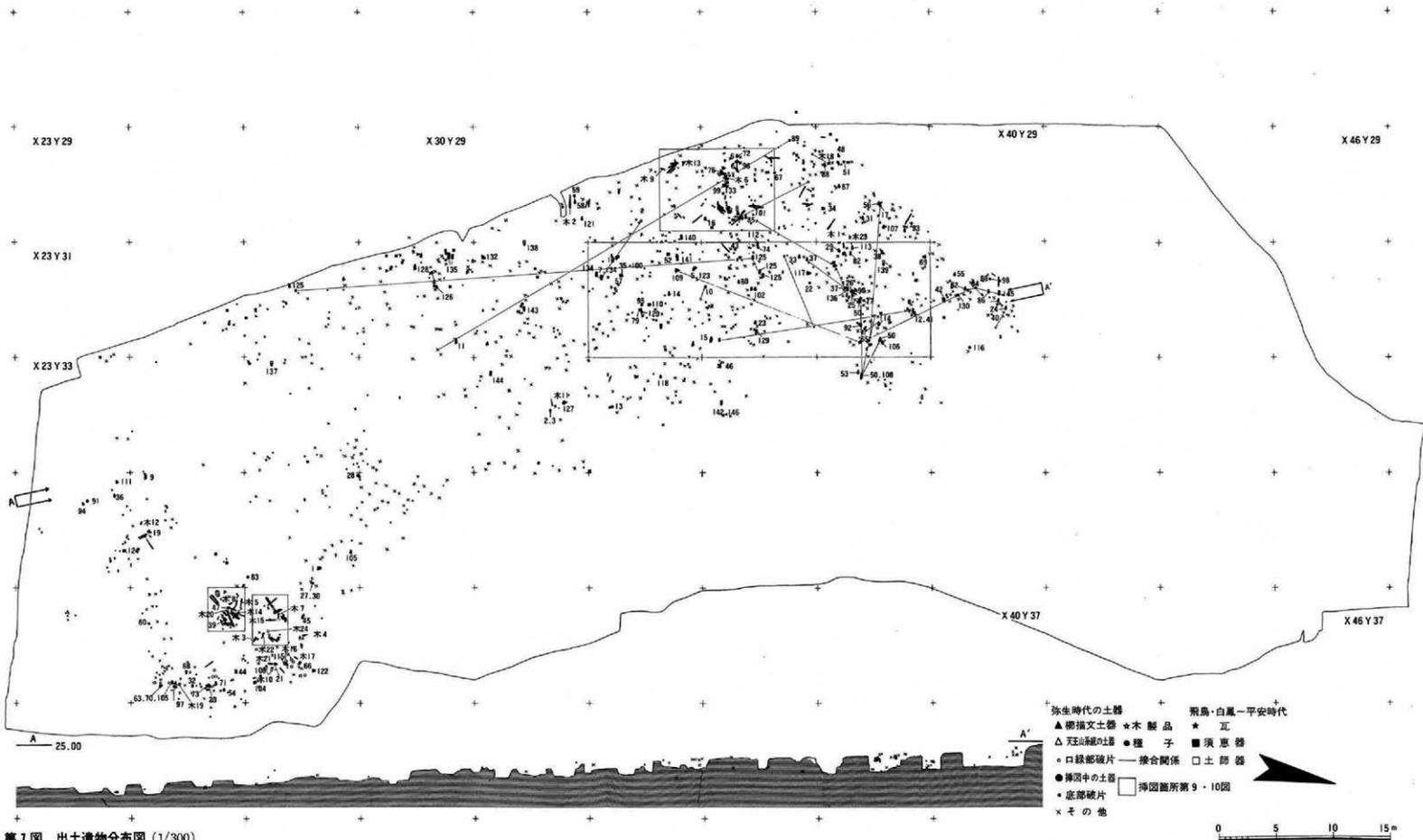
第4図 No.21遺跡の地形と区割図



第5図 遺構全体図(約1/1,100)



第6图 遺構全体图 (1/300)



第7図 出土遺物分布図 (1/300)

4 遺構

① 遺物の出土状態

弥生土器 柳指文土器はX25Y35・37(以下X-Y省略)、26-39、28-31・36、30・31-32、33-33、34-31・32、35-29・32、36・37-31、37-32・33、38-32から出土。天王山式系統の土器は29・30-31、31-31、32-33、35-30-32、36・37-31、37-32から出土。いずれも小龍岡ながらまとまって出土したが、共存関係は不明である。主体を占める後期の遺物は、単独、及び重複した穴より出土する。但し北側の単独穴よりの出土はない。

土師器 27-33、31-30、33-30、38-31より4点出土。

須恵器 24・26-32、27-32・33、28-34、29・30-31、31-32・33、32-31・34、33-31、34-30-32、35-30・33・34、36-28・29、37-29・31、38・39-32より42点出土。

瓦 26-32、27-31・32、30-31、31-32、32-30、34-32より7点出土。

土師器・須恵器・瓦の出土状況は、ほぼ丘陵裾部近くの上層より多く出土している。

木製品 25-35・38、26・27-37、27-38、28-37、32-30・33、34・35-29、37-29・30から出土し、およそ2箇所に、集りが見られ、掘削具と容器等があり、弥生時代後期に属するものと解される(第10図)。

② 採土穴

標高21~24.5mの位置に検出され、標高25m以上に検出された穴は、採土穴ではない。穴は単独のものと重複したものに大別することができる。

③単独 101~104、106・108~110、121~127号が属する。これらの中で北側に位置する穴、124~127号穴は検討の結果遺構とは認められなかった(風倒木等が考えられる)。121~123号穴は規模0.8m×0.6mの隅丸方形を呈し深さ0.2mあり、覆土層には焼土及び炭化物等が含まれている。

101号穴 規模2.6m×2.5mで形態は円形である。深さ1.2mあり、ほぼ垂直に掘り込まれている。

102号穴 検出時の規模は2.3m×2.2mで形態は円形であり、覆土約0.2m掘り下げた所で段があり、1.1m×1.1mの大きさになり、深さは2.2m断面形態は円筒状になる。覆土は7層あり、青灰色粘土層の面まで掘り抜いてある。

103号穴 規模は2.2m×2.2mで形態は隅丸方形であり、底面にも穴を持ち、深さは0.9mある。覆土層は7層あり、灰白色粘土層まで掘り込まれている。

104号穴 規模2.4m×2.4mで形態は円形で深さ0.8m、覆土は7層あり灰白色粘土層を掘り抜いている。

106号穴 規模3.2m×2.3mで形態は楕円形で深さ1.1m、覆土は7層あり淡灰色砂質土上面まで掘られている。

108号穴 規模2.2m×1.8mで形態は方形で深さ1m、覆土は7層あり灰白色粘土層を掘り抜いている。

109号穴 規模1.2m×1.2mで形態は円形で深さ0.55mある。

110号穴 規模3m×1.5mで形態は楕円形で深さ0.9m、覆土は7層あり灰白色粘土層を掘り抜いている。

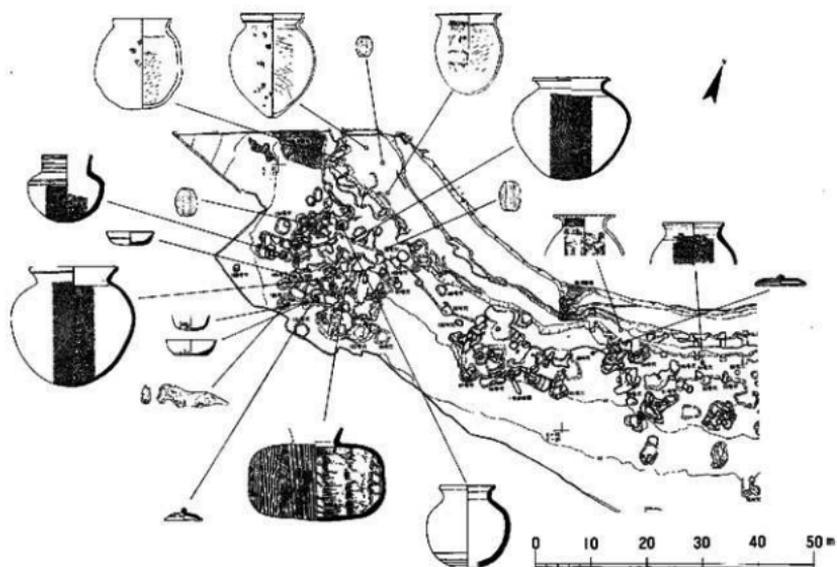
これらの穴は、多分に灰白色粘土層を採掘したと思われる。

④重複 基本的には直径1.5m前後の規模の穴が1単位として連続して掘り込まれたと考えられる。坑道等も考えられるが確認しえなかった。土層の状態は互層の状態となっており、廃棄された採土穴に土器類の廃棄も行われる。

基本的には壑坑であり、採土の方法は藪田東遺跡〔原 1982・第26図〕で示された採掘方法の如く次の4段階が考えられる。第1段階 壑坑の掘削の後、底部の粘土を採掘。第2段階 壁部分の粘土の採掘。第3段階 採掘坑の拡張及び旧坑の埋め戻し。第4段階 拡張部分の粘土の採掘。

なお8世紀以降の採土も(X27~30Y29~30区)考えられ、丘陵裾部の未掘の場所にも広がる可能性もある。

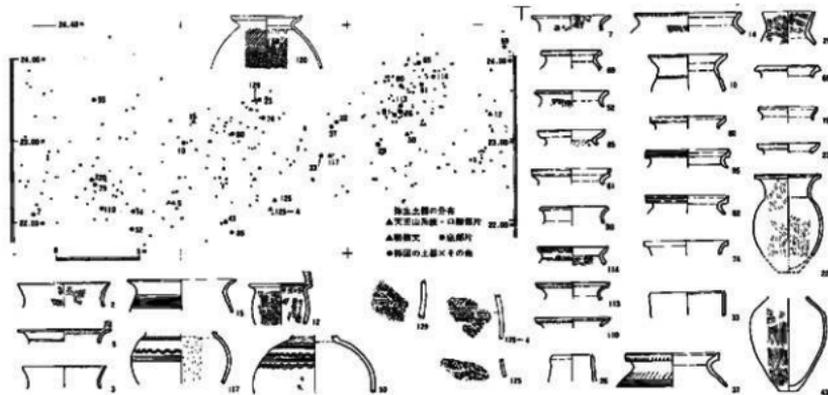
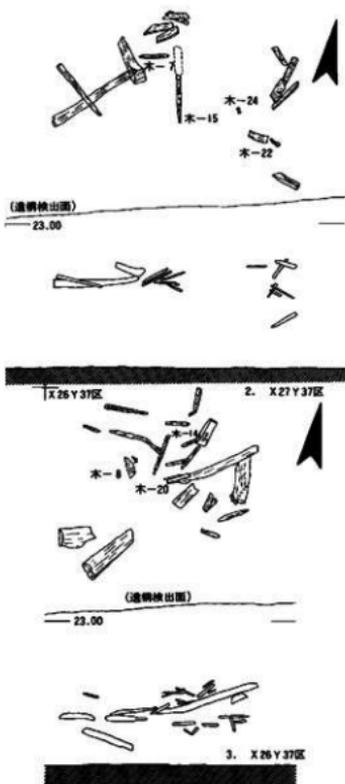
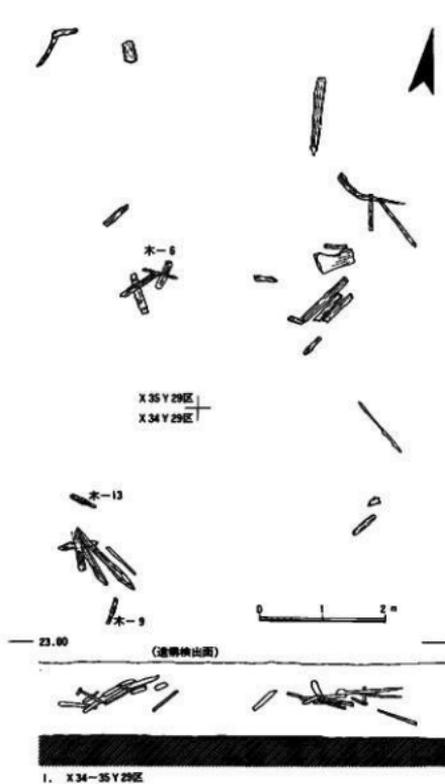
57年調査では古墳時代前期・飛鳥時代後期の採土穴が確認、58年調査(第8図)主に飛鳥時代後期の採土穴が主体的に確認される。なお、弥生時代・奈良~平安時代の遺物もありこの時期と考えられる採土穴も存在するかもしれない。



遺物	富山					石川				新潟							
	魚野	佐野	五箇野	富山	流田	花野	中野	小野	大野	次野	新野	戸野	砂野	佐野	山野	野野	下野
土器A																	
土器B																	
土器C																	
土器D																	
土器E																	
土器F																	
土器G																	
土器H																	
土器I																	
土器J																	
土器K																	
土器L																	
土器M																	
土器N																	
土器O																	
土器P																	
土器Q																	
土器R																	
土器S																	
土器T																	
土器U																	
土器V																	
土器W																	
土器X																	
土器Y																	
土器Z																	

第8図 58年度調査区出土遺物状態図(上) X10~20 Y10~20区

第9図 近県の柳描波状文(下) 分類は〔佐原 1964〕による



(上) 第10図 木製品出土状況(上%) 第11図 土器の垂直分布図(下) 数字は押印番号と一致

5 出土遺物

遺物には先土器時代の剥片1、縄文時代後期の土器1・磨製石斧2・すり石1・弥生時代中・後期の土器が平箱に約60箱、飛鳥後期以降の瓦・須恵器・土師器が合せて平箱5箱を数える。他に弥生時代の木製品及び加工皮をもつ木片が122点出土した。先土器時代の石器は安山岩製横長剥片で、X28Y38区から検出され、縄文時代の遺物は点在していた。

(1) 弥生時代の土器 底部数は小片を含め 334点を数え、口縁部数は 223点にのぼる。この口縁部の内訳は弥生中期の標識土器35点、天王山系統の土器2点、残り186点が後期に属する。土器は殆んど小破片で表面の風化が著しい。

① 中期の土器 (1-15・49・50) 標識文をもつ土器で、壺・甕がある。甕が多く、色調は淡褐色・淡黄色をなし、胎土の砂粒が目立ち器面がざらざらした感じの土器である。1-3は壺で、口縁部内面に櫛状施工具による刻みや、羽状圧痕文をつける。

4-15・49は甕であり、器面に煤状炭化物の付着例を多くみる。口縁部は大きく3形態に分かれる。1類は単に外反するもの(4・5・11-13など)、2類は外傾するもの(10・14)、3類は内湾ぎみに外反する5があり、体部に刺突文をめぐらせる6・10がある。口縁端部・内面には櫛状施工具による刻みや羽状圧痕文、あるいは指頭による押捺を加えたりする。5・15の体部には直線文を引く。

なお、50の頸部に隆帯を貼付ける壺は後期に属すると思われ体部に櫛標波状文1種C、〔佐原 1968〕を施文する。

② 後期の土器 土器の器種ごとの割合は、口縁部の比率から第13図の数字になり、壺が19.9%、甕72.6%、鉢2%、台付部・脚部2%、その他壺または甕が4.1%であった。今回の調査区は集落遺跡と異なる。煮炊き用の甕が最も多く、次いで貯蔵を主用途とする壺が少し、盛り付け用の鉢・高杯がわずかであり、中期の土器と同様に食物・飲物容器として持ち込まれ、廃棄されたものと考えられる。以下、ここで便宜的に器種の分類を行う。

壺A (16-18) 口縁部が「く」の字状に外反する広口壺で、頸部に明確なくびれをもつ。調整はていねいで、口縁端部は16・18のように面取りを行う。

壺B (21・22) 短く直立する頸部に大きく外反する口縁をもつ広口壺である。端部はつまみあげてヨコナデを行う。22は外面ヘラミガキを行い、長胴の体部内面をヘラケズりする。

壺C₁ (19) 二重口縁の壺で直立ぎみの長い頸部をもつ。端部は長く、浅い凹線をめぐらせる。36は色調・胎土・細かいハケ目が同様であり、同一個体と思われる。

壺C₂ (20) 二重口縁の壺で短い頸部が強くくびれる。3条の浅い凹線を加える。

壺D (24-35・38) 長胴の体部に短い頸部を付け、壺の中では最も量が多い。口縁部の立ち上がりは、少し内傾するものや内湾するもの、直立するなどの変化がある。口縁端部は強くヨコナデを加え、丸くおさめる例が多く、29・32・34のように面取りを行うものもある。口頸部の外面は縦方向のハケ目調整を留め、体部に輪積み痕・ハケ目が残る30と、ヘラケズリ調整をする35がみられる。

壺E (42) 口頸部が太く直立する長頸壺で、口縁はヨコナデ調整をする。体部は卵形をなし、内外面にハケ目調整を行う。外底面の中央は小さな中凹みとなる。

壺F (39・40) 40は口頸部が大きく外反して開く長頸壺で、口縁端部はわずかにつまみあげてヨコナデ調整する。39は直立する口頸部が口縁部で強く屈曲するもので、端部に面取りを行う。

壺G (37) 近江系の甕に含まれるかもしれない。しかし口縁断面が三角形となり厚手なことなどから一応壺としておく。体部上半には、櫛状具による列点文と直線文をめぐらせる。

甕A₁ (52-54・58・59・61・62) 口縁部が「く」の字状に外反する甕で、口縁端部が面取りされ、角ばるものである。外反のしかたは54のように直線的なものと、ゆるく弧を描くものがある。61・62は体部内面をナデつける。

甕A₂ (55-57・60) 「く」の字形に外反する甕の口縁端部を丸くおさめるもので、球形の体部内面はヘラケズリさ

れる60と、ハケ目を残すものや輪積み痕を残すもの等がある。

甕B₁ (65・77) 口縁部を全体に大きくふくらませ、口縁端部上端を少しつまみあげヨコナテを行う。

甕B₂ (64・66・68・69～71・78) 口縁端部を上下にふくらませ口縁帯を広くしたものを。

甕B₃ (67・72・73・75) 幅広くした口縁端部が直立または外傾させるもの。

甕C₁ (79～84) 二重口縁をもつ甕で、口縁端部を丸くおさえる79～81と、少し尖りぎみとなる82～84がある。

84には体部上半に櫛状具による列点をめぐらせる。

甕D 次の各々の甕の口縁端部に2～3条の凹線を付けたもの。D₁ (90・91) はA₁に、D₂ (92) はB₁に、D₃ (93) はB₂に、D₄ (106) はB₃に加えた形状のものである。

甕E₁ (94～96・102) 直立または内傾する二重口縁帯に2～3条の平行な凹線を引くものである。

甕E₂ (98～101・103) 外傾する二重口縁の幅広の口縁帯に数条の浅い櫛描き平行線文(縦凹線文)を入れる。

甕F₁ (86～89) 無文の受口状の口縁を付けたもので、角ばった口縁端部がわずかに水平か、少し内傾する。

甕G₁ (110～116) 有文の受口状の口縁をなすもので、櫛状施工具による刺突・圧痕文を口縁部に押し、直交または少し斜めに施す。116には体部上半に櫛描直線文・波状文・刺突を加える。内面上半はナデつける。

甕H (107～108) 「く」の字状に外反する口縁部に櫛描の刺突・圧痕文や刻みを加える。109の体部はハケ目と同一の工具と思われるもので波状文を描き、その縫ぎ目がみられる。

甕I (120) 口縁端部をつまみだしにより、はねあげる。体部外面はハケ目調整後、タキ調整を行う。

底部 44・46～48は壺の底部であり、長刷形のもと、底部から体部の立ち上がりか45のようにいちじく形となる形状がある。104～105は甕の底部で、外面にすずの付着をみる。

鉢A (121) 半球形の体部に大きく外反した口縁部をもつ。外面に厚くすずが付着する。

鉢B (122) 半球形の体部に大きく外反する二重口縁部が付く。口縁部には凹線文が付く。他に1例ある。

鉢C (118) 大型の鉢で、壺の体部下半を切り取った形をなす。口縁部近くに2孔1対の穴をもつ。

鉢D (51) 内外面ヘラミガキした大型の鉢である。口径・傾きが不明確であり復原図として示した。体部に環状把手の剥離痕がみられる。

台付の脚部 (118) 外面にハケ目を残し、鉢または甕の脚部と考えられる。

高杯 (123) 中実の円筒状の一端が闊脚する。成形が粗雑でヘラ状具の痕が外面に残る。高杯の脚部であろうか。この他に高杯の杯部と柱状部の接合に凹板充塞法を行い用いた円盤片が1点ある。

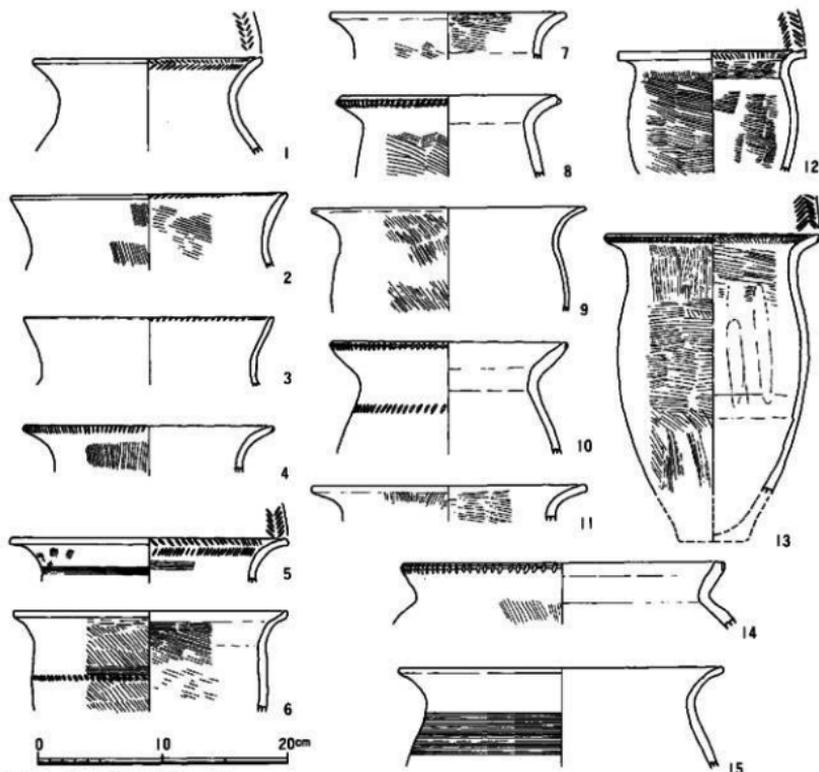
③ 天王山系統の土器 (第18～20図)

この土器は少なくとも7個体を数える。出土箇所は大きくX30Y31区、X37Y31区を各々中心とする2箇所より発見された。同時に後期の土器と中期の櫛描文土器がある程度のまとまりをもって、出土している。遺物の平面分布図(第7図)や壺面分布図(第11図)でも共伴関係はいずれに所属するか明らかにできない。

土器は暗褐色・褐色の暗い色調で砂粒の混入が目立って多くみる。器面の剥落したものもあり、文様が不鮮明となっている。第20図63・65の甕は復原推定図である。65は口縁部に小突起をもち、内面にも沈線を3条めぐらせる。体部には縄文を地文とし、2つの平行沈線を短く2本の弧線で直交させて結び合う。また沈線で囲まれた部分に三角形の突出した沈線を付ける等、頭川遺跡出土の土器と文様構成が似る。

63は山形口縁となり縄文をころがし、表面の一部が剥がれ文様が不明瞭である。体部の文様帯には菱形の沈線文様を配し、下端に鋸歯文をめぐらせる。内外面は細かいハケ目が残る。126・129・132はいずれも鋸歯文をもち文様の下端に当たる。地文は縦走または斜行するRLの縄文をころがす。127は壺の表面が磨滅し、わずかに交互刺突文と平行沈線が残る。

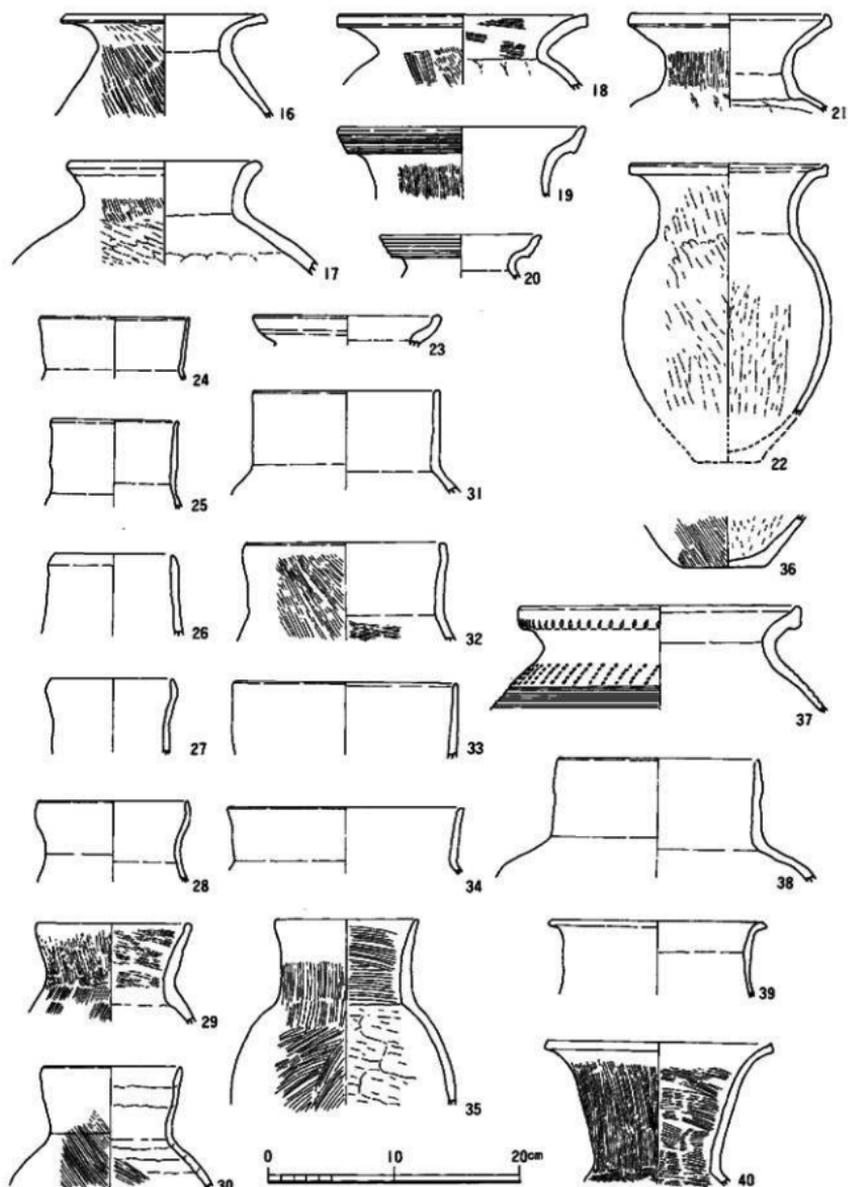
(上野)



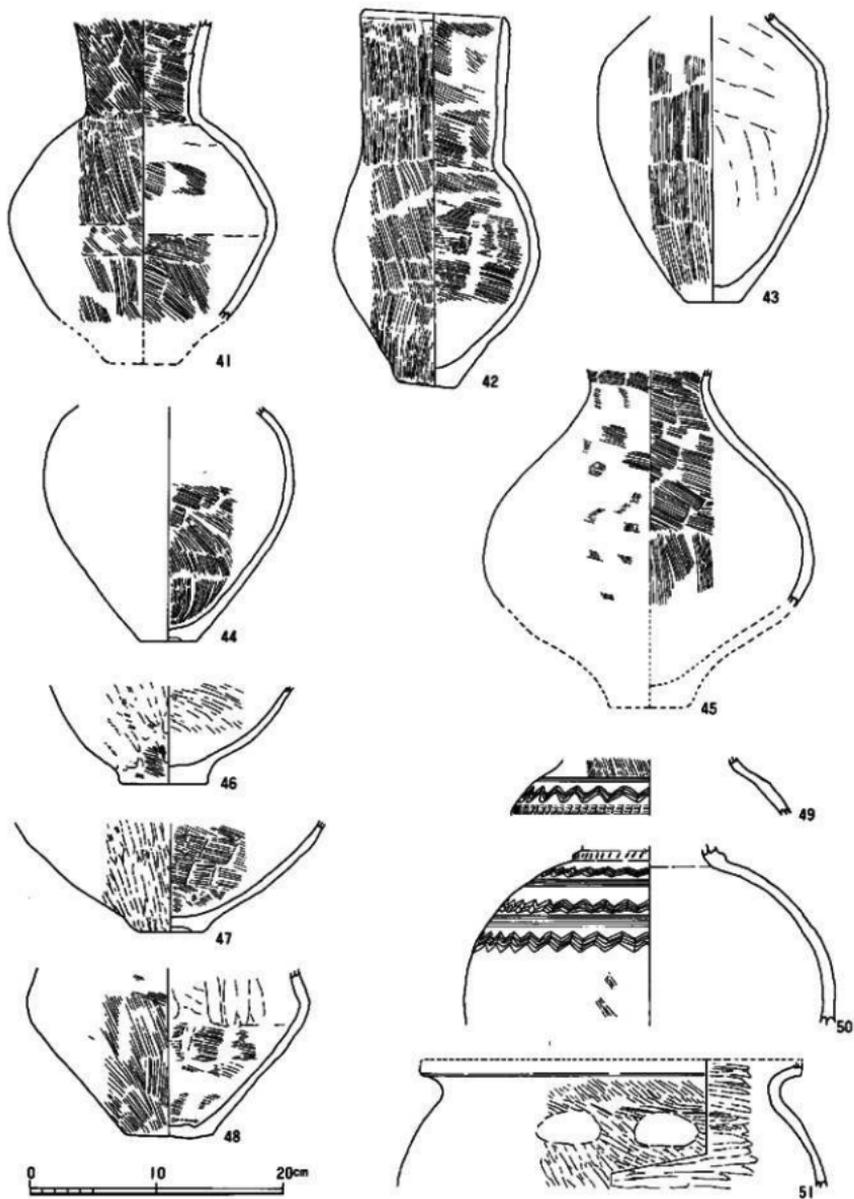
第12図 出土遺物実測図(1/4)

壺		壺		鉢	
19.9%		72.6%		2%	
A 1.6%	D 13.4%	A 1 4.3%	C 14.0%	A 0.5%	C 0.5%
B 1.1%	E 1.1%	A 2 4.3%	D 33%	B 1.1%	
C 2 20.5%	F 1.1%	B 23.1%	E 9.1%	台付部	脚部 1.1%
C 1 10.5%	G 0.5%		F 4.3%	H 8.1%	I 0.5%
			G 1.6%		タタキ調整

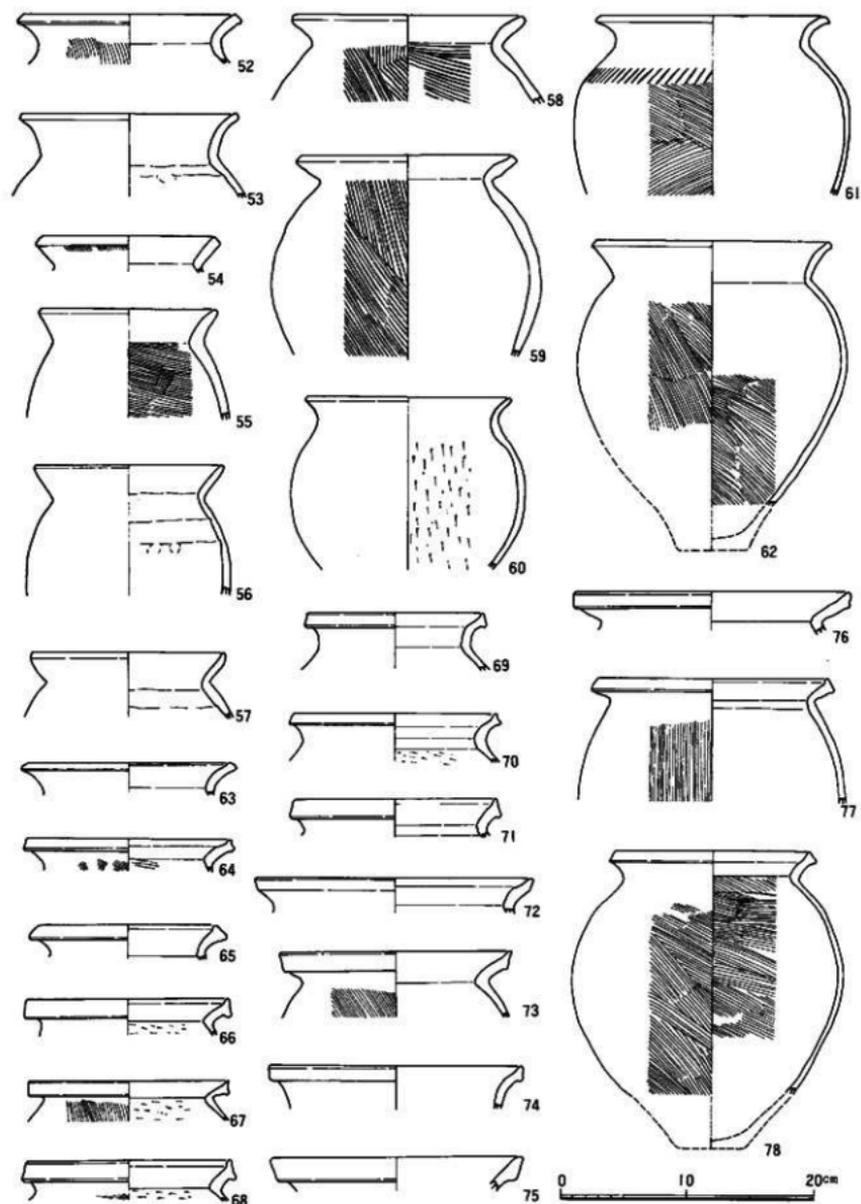
第13図 器種分類図(%は口縁部数の比率)



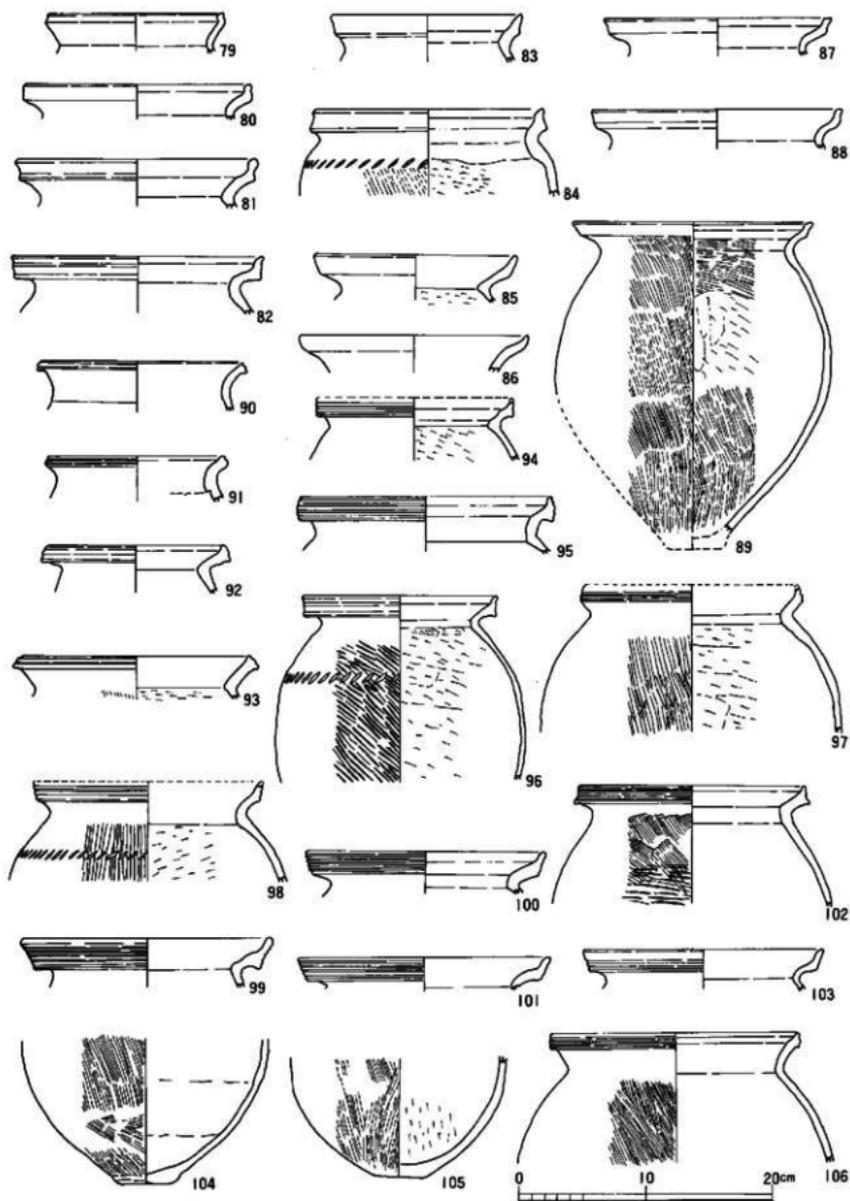
第14图 出土文物实测图(1/4)



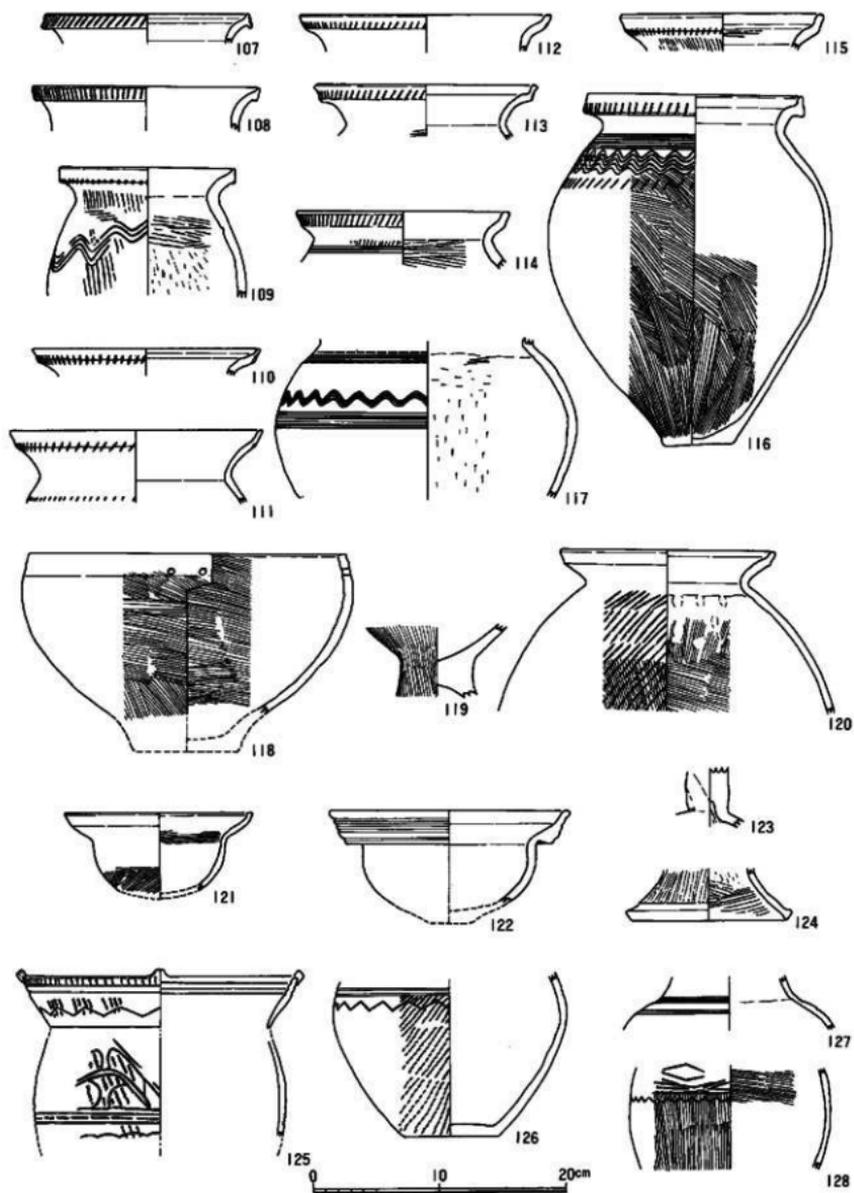
第15圖 出土遺物実測図(4)



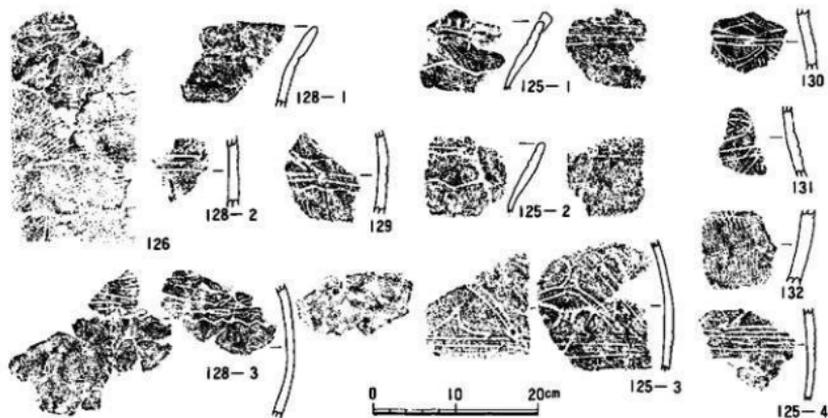
第16圖 出土遺物実測圖(¼)



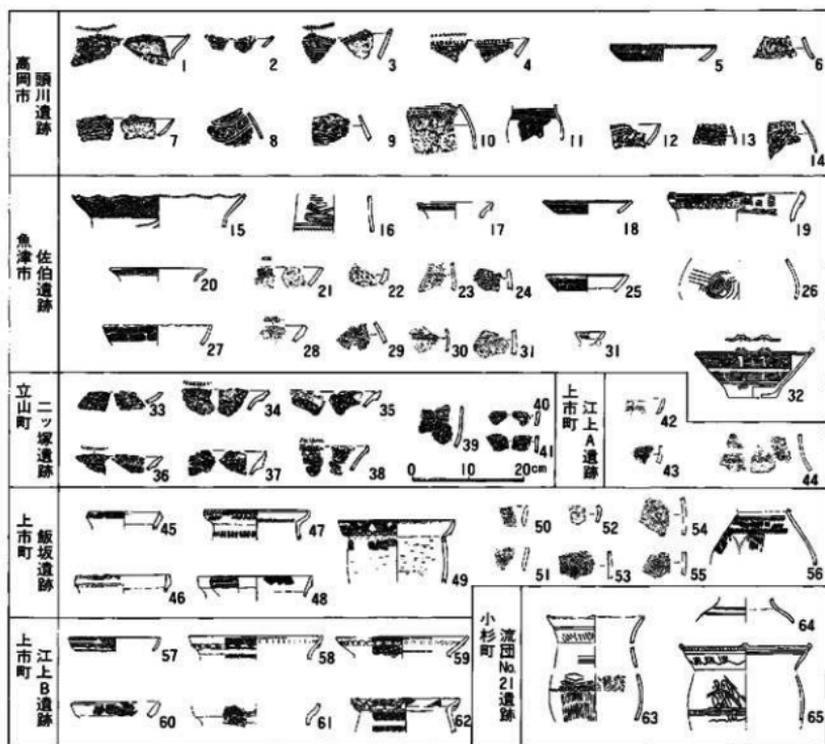
第17图 出土遺物実測図(%)



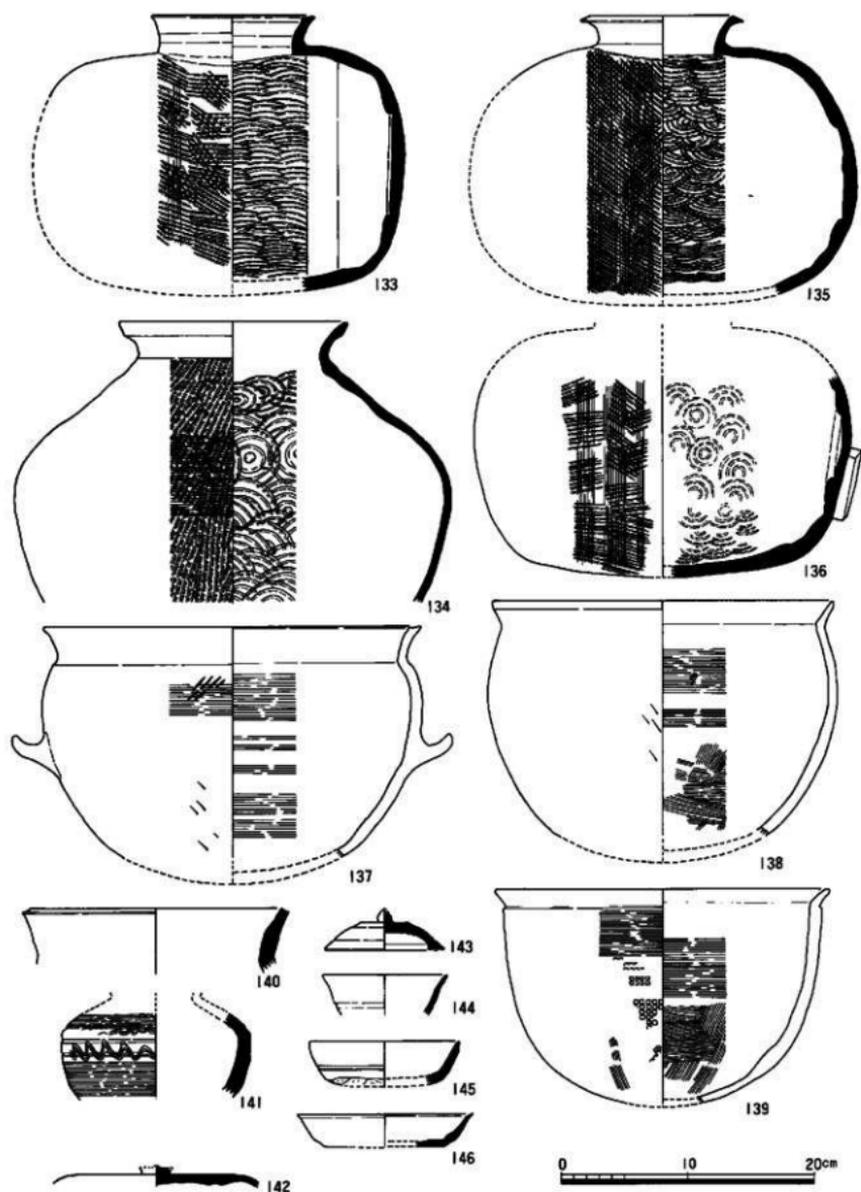
第18图 出土遺物実測図(×)



第19図 出土遺物拓影図(1/5)



第20図 富山県内出土天王山系統の土器



第21圖 出土遺物実測図(×)

(2) 古墳時代以降の土器 (第21図)

古墳時代後期から奈良時代の須恵器と土師器がある。大部分は穴群の覆土中から出土したものである。

① 須恵器

横瓶 (133・135・136) 133は口径13cm。体部の全長と器高は、復原するとそれぞれ29cm、22.3cmとなる。口縁部はゆるく外反し、口縁端部は内傾する。口縁部の高さは2.4cmと短い。体部外面は平行タタキの上からカキメ調整する。内面には同心円文を顕著にとどめる。体部の外面に複数の破片が熔着する。X35Y29区出土。135は口径11cm、体部の全長と器高は、復原するとそれぞれ30.8cm、23.3cmである。体部の外面は平行タタキの上からカキメ調整し、内面には同心円文をとどめる。口縁部は強く外反し、端部は外傾して突出する。口縁部は高さ2.5cm。X30Y31区出土。136は体部の破片である。分量は復原しえないが、前二者に近くなると推定される。内外面の調整は前二者と同じである。133と同じく体部の外面に複数の破片が熔着する。

壺 (134・140) 口径18cm、体部の最大径34.8cmである。体部の中位よりやや上に最大径をもつ。器壁は薄く、厚さ5mm前後である。口縁部は頸部からくの字形に外反し、口縁端の外面がやや肥厚して稜をもつ。体部外面は平行タタキの上から一部カキメ調整する。内面には同心円文を顕著にとどめる。底部を欠く。X33Y31区出土。140は口縁部の破片である。口径21.2cm。X34Y31区出土。

壺 (141) 体部の破片である。台付壺と推定される。最大径15cm。三条の浅い沈線の間に横縞波状文を施す。その他の部分はカキメ調整する。X34Y31区出土。

杯 (142・146) 142は扁平なつまみをもつ杯蓋である。平坦な頂部はロクロケズリする。端部を欠く内面カエリの消滅後のものである。143は径9.6cm、高さ3.4cmの小型品である。内面にカエリをもつ。カエリの端部は口縁端の下方には出ない。頂部をロクロケズリする。つまみは乳頭状で細高い。X31Y32区出土。144は口径10cmの杯身で底部を欠く。X31Y33区出土。145は口径12cm、器高3.7cmの無高台の杯身である。体部外面に一条の沈線をもつ。外底面を不定方向に静止ヘラケズリする。146は無高台の杯身で、復原口径14cm、器高2.7cm。X35Y33区出土。

須恵器の時期 内面にカエリをもつ小型の杯蓋143は、このNo21遺跡の第1・2号窯跡出土のそれと同一型式である。その年代は7世紀の中葉すぎと考えている〔岸本 1984〕。台付壺と考えられる141も、No21遺跡の出土例のなかにそれに近いものがあり、同じく上記の時期と考えられる。また、外底面を静止ヘラケズリした杯身145や3点の横瓶、壺134も同時期のものであろう。

杯蓋142、杯身144は奈良時代のものか。杯身146は時的にやや下るかもしれない。

① 土師器

鍋 (137～139) 137は口径30cm、復原器高20.6cmをはかり、把手をもつ。口縁部はゆるく外反し、口縁端はわずかに内傾する。口縁部は内外面ともロクロナデ。体部外面は上半をタタキのちカキメ、下半をヘラケズリする。内面はカキメ調整する。138は口径27cm、復原器高21cm。把手はもたない。体部の最大径は27.8cmで口径よりもわずかに大きい。体部外面を静止ヘラケズリ、内面の上半をカキメ、内面の下半をハケメ調整する。X31Y30区出土。

139は口径26.6cm、器高27.5cm。直線的に外反する短い口縁部をもつ。端部は丸くおさめる。体部外面は上半部をカキメ、中ほどを格子タタキ、底部近くをハケメ調整する。内面は上半部をカキメ、下半部をハケメ調整する。把手はもたない。X37Y31区出土。

これらの土師器の鍋は、径高指数(器高/口径×100)をみると137では68.7、138では78、口径より器高の大きな139では103で、深鉢形を呈する。調整技法の特徴としてロクロ技法(カキメ・ロクロナデ)・タタキ技法・ヘラケズリ技法が採用されていることを指摘しうる。これらの「須恵器の調整技法」が土師器の鍋・甕に導入されるのは当地では奈良時代以降のことであり、形態の特徴と考えあわせて、鍋は8世紀代のものと考えておく。(岸本)

(3) 木製品・種実遺体 (第23~25図)

今回の調査で得られた木製品の総数は 122点である。用途別に見ると掘削具と容器が大半を占め、杵などが若干見られる。このように用途が推定できるのは43点で、残るものは棒状品や板状品として包括される。

これらの木製品は、第7図に示すように概ね二つの地点に集中し、穴群覆土下層の弥生時代後期の土器に伴う。この二つの集中地点における木製品の種類に差異はない。以下、用途にそくして種類ごとに説明する。なお、実測図断面の木理は、木取りを明確にするために概念的に図示した。また、板状のものは図示面を表として説明する。

掘削具 (1~11)

成品中最も多い種類である。形状、木取りなどから鋤と掘り棒に分類できる。いずれも鋭角な刃部を作っており、掘削具としての機能を持つ。

鋤 (1~4) 身と柄を一本で作り出すもので、長柄鋤と呼ばれるものである。肩はゆるくカーブし、刃部は長方形となる。形状で類似する種実木製品とは刃縁の作りの違いから明らかに区別される。

1は全体的に腐朽しているものの完形品である。肩から刃部にかけてわずかに調整痕を認めるのみで、全体が加熱により炭化している。広葉樹。全長 125cm、身の最大幅12cm。2は柄と刃部の一部を欠く。柄の断面は、楕円形を呈し、調整はていねいである。しかし裏面は削りした後、簡単な削り調整が行なわれるだけである。広葉樹で堅木。残存長 107cm、刃部最大幅11.5cm。3は鋤の未製品と考えられるものである。柄を失う。刃部中央の側面にクサビが打ち込まれた状態で残り、半截途中のものと考えられる。クサビは幅 1.5cm、断面三角形を呈し、堅木である。クサビの先端は、刃部中央にまで達するが、半截は刃縁付近で裂け目が走り、失敗に終わったものと考えられる。残存長45cm、最大幅11cm、厚さ 6.5cmを測る。4は柄を欠くものの1~4の中では最も均整のとれたものである。刃部表面はていねいな調整が行なわれ、刃縁を鋭角に仕上げた。裏は削り面を残し、刃縁だけが調整される。各所に加熱による炭化が認められる。広葉樹。残存長44cm、刃部幅10cm。

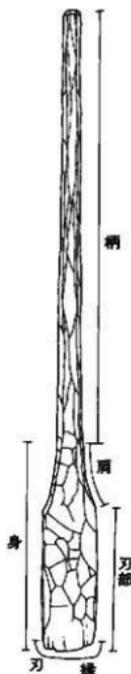
掘り棒 (5~7・9~11) 7を除き芯持ち広葉樹材の先端を両側から削り、鋭角な刃部を作る。掘削具としての機能を持ち、一応、掘り棒と呼ぶことにする。

5は柄の基部を欠く。柄の径5cm、残存長64cm。加熱による炭化が見られる。6も柄の基部を欠く。刃部方向にしたいに太くなり、刃部は炭化部分が顕著である。残存長72cm、刃部の最大幅6cm。9は柄が「く」の字状に曲る。全体に枝の節目が多く、これらを取り除くためと思われる加熱痕が目立つ。刃縁は圭頭状になり、使用による磨耗と認められる。長さ80cm、刃部幅6cm。10は完形品である。柄基部は丸く仕上げられ、刃縁は三角形となる。腐朽しているため、使用によるものか否かは不明。長さ99cm、径7cm。11は10を小さくしたようなもので、長さ60cm、径4cmである。7は芯持ち材の板の先端を両面から削り、鋭利な刃部を作る。刃縁は三角形に整えられる。掘り棒として分類するには多少問題を残すが、掘削という機能を有することから、同様の扱いをした。広葉樹でカシのような堅木。残存長69cm、幅6cm。

容器 (17・18・20~23)

いずれも桶の類で、胴部7点、底板5点出土している。21を除いては、出土地点が近いものの同一個体が否かの識別は不明。なお、胴部は広葉樹、底板はすべて針葉樹が用いられる。

桶胴部 (17・18・21・22) 17は口縁部に削り出しによる把手が作られる。内外面ともていねいな調整が施され、内側には底板の受け部が断面三角形に削り出される。堅木取りの板目材。底部内側に炭化部分が見られる。口縁部までの高さ30cm。18は口縁部に紐穴を持つ。器高26cm。



第22図
鋤部位名称

21は小型の桶で、上部を欠くものの底板が付いたまま検出した。芯去り材をくり抜いて作り出すいわゆる一木作りと考えられる。底部が広く、内反りきみになるが口縁部内径は底板の径を下回らないはずである。

この資料で注目されるのは、胴と底板が結合したまま出土したことである。このことは底板面の内・外を識別する手がかりを与えてくれるものである。すなわち、底板が銅板の受け部と接する部位は、斜めに削られるために、その断面は逆台形となる。また、管見では蓋と見做し得るものには、逆台形あるいは台形になるものはなく、この時期に限れば、蓋と底板とを区別する一助にもなり得ると考える。

22も小型の桶である。推定口径10cm、器高22cmを測り、いわゆるコップ状になる。芯去り材で一木作り。

桶底板 (20・23) 20は円形で、内面より外面がていねいに調整される。内面縁辺には、時計と反対方向に回しながら削った痕が見られる。径21cm。23は楕円形を呈し、内外面ともにていねいな仕上げである。長軸での径24cm。

杵類 (13-16)

整杆1点と片干杵3点がある。いずれも芯持ちの広葉樹を材とし、握り部と身を作る。13は一端を削り、握り部を作る。身の先端は、割れて一部を失う。長さ30.2cm、握り部の径2cm、身の径4cm。14は身の先端を欠き樹皮を残す。残存長21cm、最大径2.8cm。15は身に木質組織のつぶれている箇所があることから、敲打具として使われた可能性がある。16は整杆。全体的に腐朽が著しく、やせこけた状態であるため、各所に節目が露出する。握り部付近にわずかに削り痕を認めることができる。

用途不明品 (8・12・19・24)

鐏状品 (8) カシのような堅木を材とし、鐏の身のように整える。基部は6cm角程に整え、刃部を鋭角に仕上げられる。刃縁は斜めになり、使用による磨耗と考えられる。着柄の可能性はなく、手鋸のような用途が考えられる。

有縁木製品 (12) 両端を欠くため全体の形状は不明。8×5cmの角材の一面に幅1.5cmの「U」字形の樋を掘り込む。樋は直線的かつ滑らかに仕上げられる。広葉樹で堅木。

シャモン形木器 (19) 端部を欠く。針葉樹の板材を削り、幅5.5cmの身と2cmの握り部を作る。残存する長さ27cm。全体が炭化している。

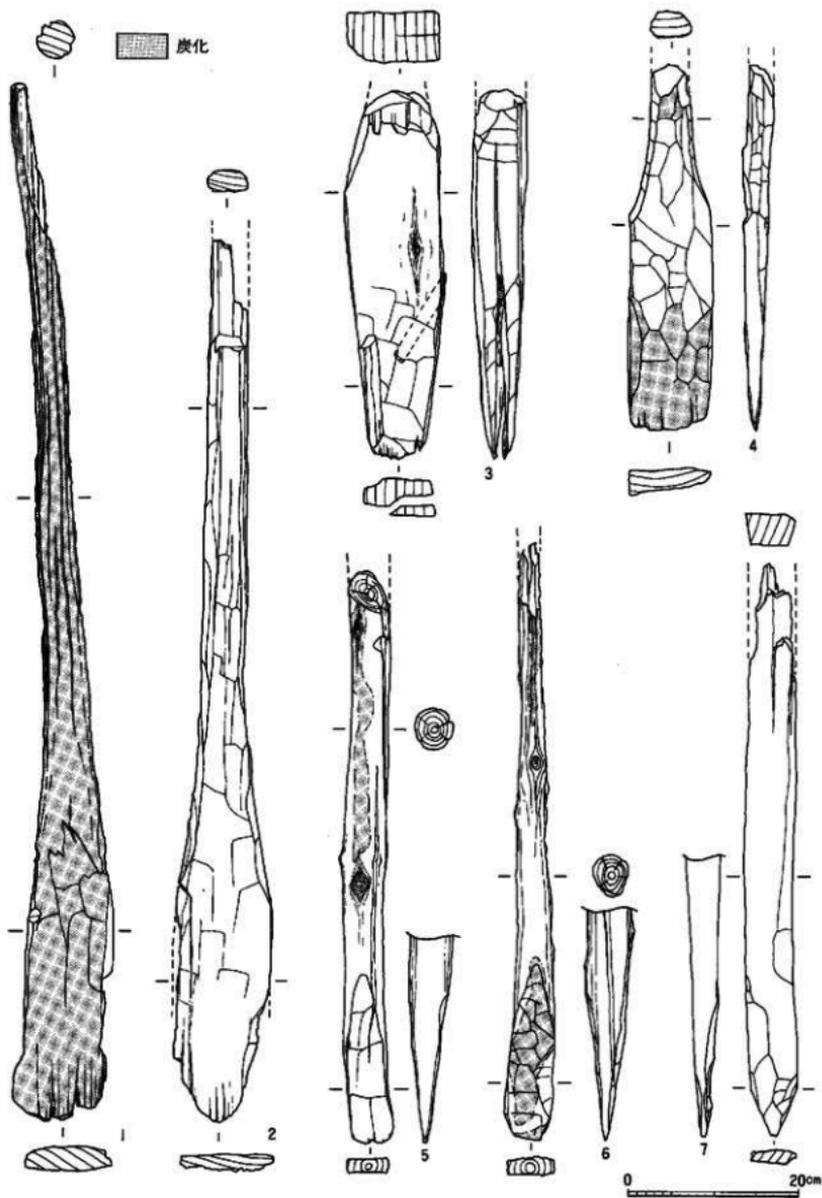
クサビ状品 (24) 一端は両面から、他の一端は片面から削り、鋭角なクサビ状に仕上げる。この両端は、相互に直交することから、建築部材などの接合に用いられたものとも考えられる。広葉樹で堅木。長さ36cm。

種実遺体

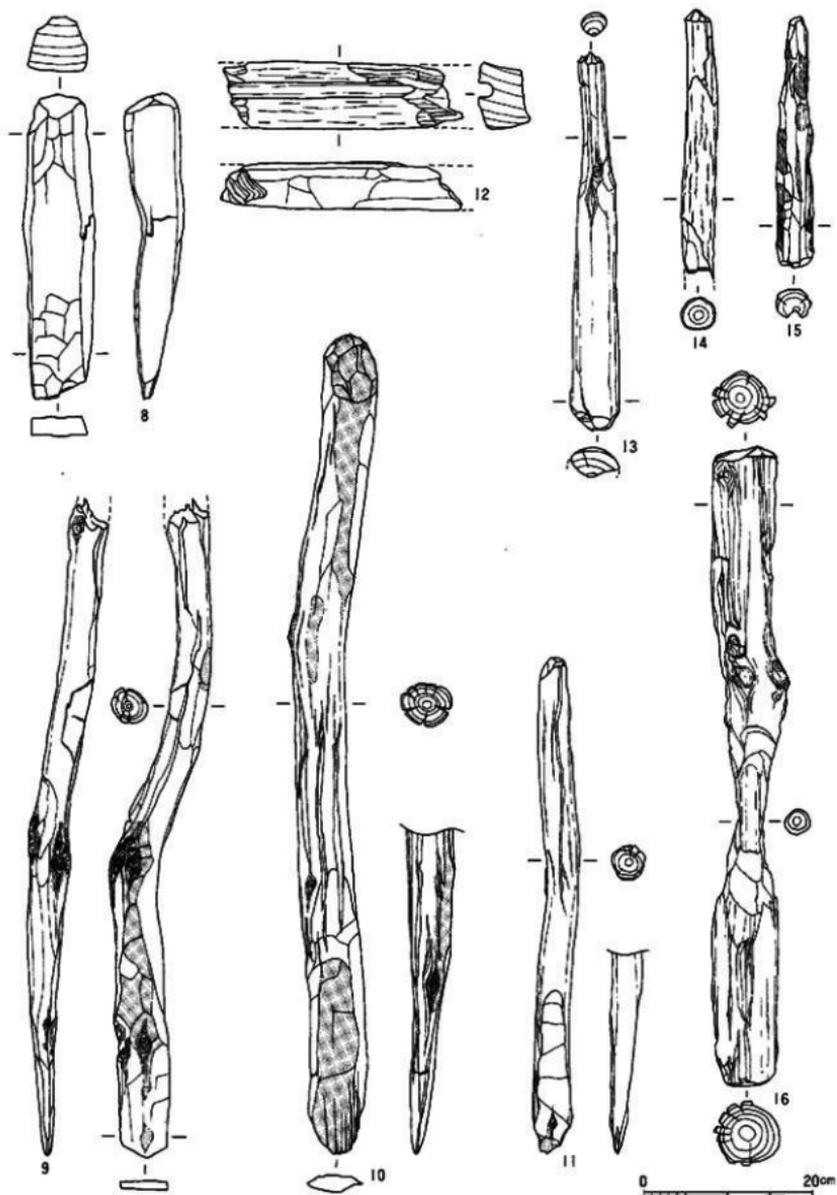
第7図に示す3地点において、合計11個の種実を検出した。いずれも穴群最下層からの出土である。内訳は表2に示すとおりである。なお、種実の同定及び観察所見は、富山大学吉井亮氏による。深謝。(関)

地点No	区名	検体No	種	類	観察所見
No. 1	X26Y37	No. 1	コナラ亜属 <i>Quercus</i> (= <i>Lepido balanus</i>) Sp	(ブナ科)	堅果、破損 クヌギ又はアベマキ?
No. 2	X25Y31	2	"	"	" " "
"	"	3	"	"	" " "
"	"	4	"	"	" " "
No. 3	X26Y36	5	オニグルミ <i>Juglans mandshurica</i> MAXIM.	(クルミ科)	核(1/2片) ネズミによる食害あり
"	"	6	"	"	" 破損
"	"	7	"	"	" ネズミによる食害あり
"	"	8	"	"	核破片
"	"	9	"	"	"
"	"	10	"	"	"
"	"	11	"	"	"

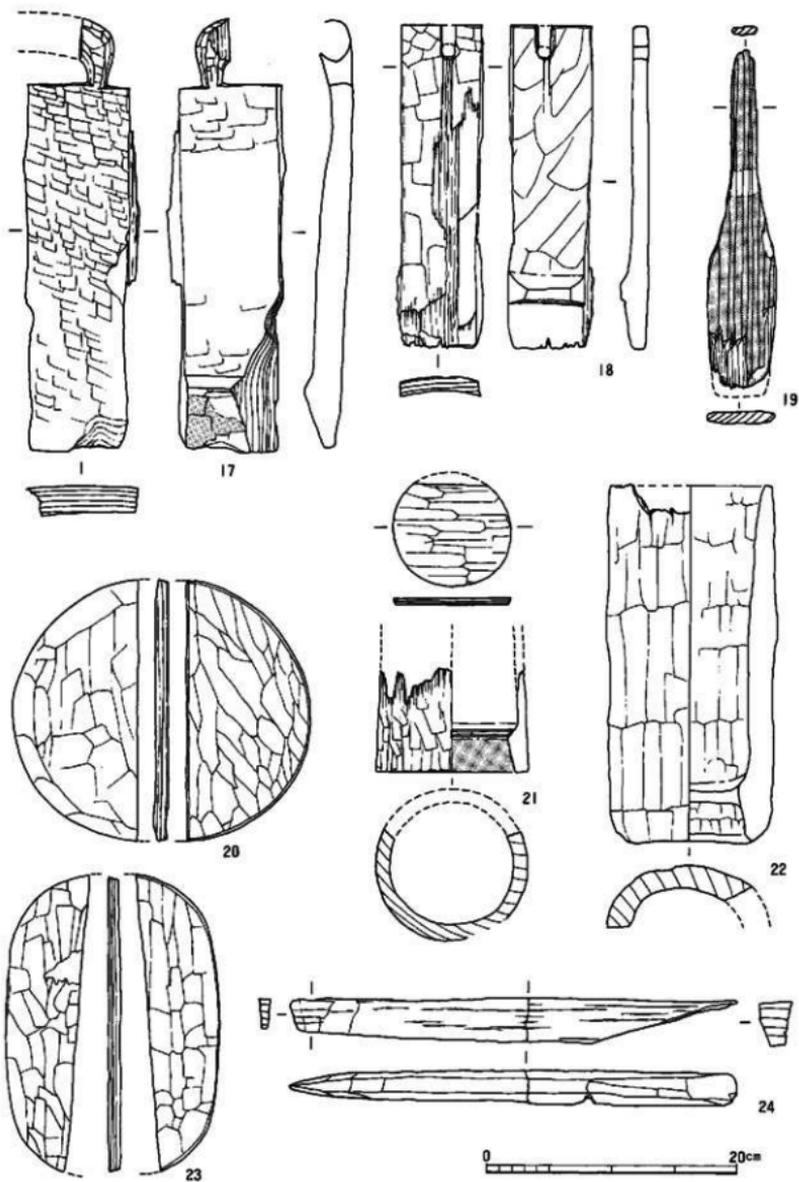
表2 出土種子一覧



第23图 出土遗物实测图(1/6)



第24圖 出土遺物実測圖(1/6)



第25图 出土遺物実測図(¼)

8 まとめ

(1) 採土穴について

① 類例 今回の調査結果に基づき他遺跡の類例を以下列記し、概要を述べる。(遺構名称は報告書に準拠する。)

馬渡遺跡 A区一台地の南端部に埴輪窯址が集中し、住居址と工房址が位置し、その北側地域に粘土採掘場(以下採掘場と略)がある。採掘場は、最下底の青白色粘土層まで達しており、深い所では表土下2m以上の所もある。この採掘場の中から、土師器・埴輪等が出土し、大半のものは投げ捨てられた状態で出土している。すべての採掘場に廃棄されているわけではなく、また、完形の杯が重ねられた状態で確認できたものもあった。B区一直径1.5~3mの円形プランの黒色土層の落ち込みが確認された。(未掘)これらは堅墳であり、表土から黄白色粘土直上までの堆積土は除去され、その下部にある黄白色粘土層と青白色粘土層の採集を目的としている。

飯田東遺跡 粘土採掘場は遺跡の北半に位置する。堅墳を基本とし、ローム層下に堆積する白色粘土の採掘を目的とし、連続的に拡張することにより粘土の採掘を行う。直径1.8m、深さ1.5mのフラスコ状の土壌が掘削作業の最低単位として扱われる。掘削工程が明記され、1個の採掘場の掘削回数も想定されている。

多摩ニュータウンNo. 146遺跡 調査できた粘土採掘場は18基あり、地形の斜面中腹から尾根に向けて、水平方向に掘り込んだ坑道と堅穴の採掘坑の構造を持ち、平面形は柄杓状をなし、規模は坑道が長さ5~10m、巾1.5m、採掘堅穴は直径2~3mあり、これら完掘された各採掘坑の粘土量計測値が示されている。他、粘土を覆めた土坑が検出され、隣接する遺跡が考えられている。

鳥田バイパス第8地点 各区の丘陵上、平坦面に単独ピットと重複ピットが確認され、前者は直径1.8m前後、深さ1m、ほぼ円形を呈し袋状になっている。後者の大きさは、壁から十分把握することはできないが、床面の起伏などにより、単独ピットと同様なピットが連続して掘り込まれている。(単体形と連鎖形)灰白色粘土を採掘し、丘陵上より下方部に掘削したものと思われる。

西村遺跡 特に北地区の東部に調査した400mの範囲に250基確認され、直径1m前後深さ0.5mの規模で粘土の採掘坑。

平城京西市跡 直径3m深さ1.5mの袋状を呈した土壌であり、分布は粘土層の地上部分に集中し、砂層部分では例を見ず、袋状に掘ることにより粘土採取を目的としたと思われ、土採取の目的は土器の原料と解することもできる。

京大農学部遺跡 ピットの大きさ直径0.5~2.5mあり、1m前後のものも多く、10数個集まって1群を形成し全体で7群ある。単独のものもあるが、規則性は認められない状態で相互に重なりあう。ほとんどのピットが粘土を掘り放つか、若しくは直前に掘るのをやめているので粘土採取跡と推定される。(粘土そのものは屑状地で珍しい)

平城京右京四条一坊十五坪 全域にわたって方形の土壌が多数検出され、重複しているが1.5m×2m前後の規模のものも多く、底面はほぼ平らで、壁面はほぼ垂直。土層は①耕土②淡灰褐色砂質土層③淡黄褐色粘質土層④灰黄色粘質土層⑤青灰色粘質土層となり、各土層の掘削は⑤の上面で止められており③と④が採取されたことと推定される。

多摩ニュータウンNo. 420遺跡 山砂の採掘坑で炭焼窯等の壁の構築に使用されたものと考えられる。

小杉渡園No. 7遺跡 直径1.8~2.5mのほぼ円形を呈し深さ1mで底部がフラスコ状の穴がある。白色砂質土層を採掘した穴と考えられる。第5号住では埴の周囲に白色砂質土を固めた方形の土塊(加熱)が検出されている。

本片子遺跡 窯の北側に上墳状遺構(長円形を呈し規模3.5m×4.6m深さ0.5~0.6m)、地山である黄色粘土が土壌の下方斜面に見られる為、粘土を採掘したものと考えられる。

龍角寺ニュータウンNo. 8地点 横穴状遺構であり、底面により3形態に分類できる。報告書では採土穴とは呼称していないが、砂層である成田層中に構築されたことあり、前記の多摩No. 146遺跡の形態と似る為、砂の採取と想定した。



第26図 粘土採掘坑・掘削横式図(原 1983)

八坂前竪跡 竪跡と竪跡の中間に位置し規模は確認長5m、最大幅4.35m、深さ2~2.5mを有する。硬質淡黄色粘土層を1.3m掘り込む。竪跡の構築等に利用したと思われる(床・壁)。

小杉流団No16遺跡 各竪跡の脇に位置した不整形な穴(大きいので6×8m)で底面の起伏がはげしい。底面が砂層中にあることにより、竪壁等の補修に使用したものと考えられる。

正家1号竪 竪跡の東側に位置し楕円形を呈する複合ピットである。長軸4m横出短軸2.6mの規模があり、ピット内に白色粘土層の薄い堆積層が見られることから地山の粘土を採掘したものと考えられる。

② 原料等より見た遺跡の分類 (Noは表3参照のこと)

①粘土を採取、1・3・4・5・7・8・9・No21、②砂質土等採取、10・11・13、③竪址群が近くにある、3・4・5(17)・6・11・No21、④竪跡に近接(付随)1・12・14・15・16、⑤その他7、8、9になる。

粘土の採集は従来、縄文時代では視覚によって容易に見出しうる粘土を採集したと思われていたが、〔新井 1973〕岩手県塩釜ヶ森1遺跡のように粘土採掘坑が確認された例もある。担当者の一入、工藤利幸氏の御教示によれば、掘り鉢状で6~7mの大きさと深さ2mあり、坑内には石を利用した足場が確認されている。土層としては明褐色粘土・青灰色粘土層を採掘している。時期は前期水~中期初頭である。(この成果に関しては、いち早く公表されたこともある。)(小林 1977)

土器等の生産は①原料(粘土)の採集、②粘土の精製、③製作(成形)、④乾燥、⑤焼成が必要であり、流団No21遺跡は前述のように調査年度により異なる様相を示しているが、生産形態から見れば①に当たる遺跡であることは間違いない。59年度事例は射水丘陵及び岡辺遺跡よりの採土が考えられる。(弥生~古墳時代の遺跡の増加と一致する。第27回参照) 反稿後、下記の2ヶ所の粘土採掘関係の遺跡を知りえた。

内原成松竪跡群(徳島県阿南市内原町)奈良時代(8世紀) 青色粘土を採取した不整形な、くぼみが多く見られその中に須恵器片や瓦片が廃棄された状態で検出される。周辺には内原瓦窯池、数ヶ所の須恵器窯跡が発見されている。久保隆太郎氏の御教示による。内原成松竪跡群発掘現地説明会資料-1983-

西賀茂角社瓦窯跡(京都府京都市北区西賀茂社町)平安時代 この附近一帯は、洪積層の粘土、豊富な水と燃料、ゆるやかな斜面と、瓦をはじめとした窯業に適した場所であり、平安京以前からも須恵器等が焼かれていた。この窯跡は平安京に関するものである。西群瓦窯跡に位置し焼上壇と称される。(この壇の中に、焼上、粘土塊、瓦、導等が随っており、瓦窯のある台地が良質の粘土層よりなっており瓦の材料となる粘土を採取したと考えられている。)

〔近藤他 1978〕 文献、「西賀茂角社瓦窯跡」1978 財団法人 古代学協会

(斎藤)

(2) 弥生土器について

① 橋描文土器

富山県の中期の橋描文土器は、石塚遺跡出土の土器から、かつて4期に細分した〔上野 1972〕。現在は先の細分で4期(中期末)とした土器を、1・2期に相伴する山陰・山陽地方の影響を受けた土器と解し、1~3期の区分と時期は従来どおりとする。なお石塚遺跡では、太い沈線と磨消し縄文をもつ壺〔上野 1972〕が、橋描文と相伴しているが、天土山系統の土器は存在していない。以下橋描波状文の描き方を、佐原氏の分類法で検討する(9図)。

1期は波状文が手先きの動きによって描き出すII種aが多く、体部文様の下端にII種bを施す例がある。

2期では、波状文が回転運動を十分利用して描くI種が多用される。次いで3期は魚形遺跡〔橋本他 1973〕・正印新遺跡〔酒井 1982〕で、I種a・cを描く。後期の岡山遺跡〔橋本 1970〕では、赤彩の壺にII種bを加えた例がある。小杉流団No21遺跡の波状文は、後期の土器にI種4例、II種aを1例数え、I・II種の両者を用いる。

石川県では、中期水神平3式併行とされる土器〔湯尻 1984〕にI種cがみられ、後属する主に畿内3様式併行の八日市地方遺跡〔橋本 1968〕・次場遺跡〔橋本 1968・1973〕・寺中遺跡〔宮本 1977〕では、I種が多く、II種

を少し併用する。また、畿内4様式に比定される戸水B遺跡(湯尻 1975)の近江地方の影響を受けた處では、近江地方と同じくI種aを施している。

新潟県では、山草荷遺跡〔大木他 1970〕・桂林遺跡〔中川他 1964〕・砂山遺跡〔関 1970〕で、I・II種が併用される。II種cは下谷地遺跡^{註2)}(新潟県 1983)と山草荷遺跡で伴う。

② 天王山系統の土器

天王山式土器は東日本に広く分布し、日本海側では石川県までの出土例が報告されている。

中村五郎氏は天王山式の特徴に次の4点をあげられている〔大木・中村 1970〕。①口縁突起の発達 ②交互刺突 ③条の縦走する縄文 ④体部文線帯の下向き弧文(または連弧文)。更に後統する型式として階瀬大山式〔中村 1964〕〔福島県 1964〕を示している。県内の天王山系統の土器は、現在10余りの遺跡から出土しており、多くは先の4つの特徴が含まれる。ただ頭川遺跡では山形口縁が多用され、二ツ塚(橋本他 1978)・飯坂遺跡〔岸本 1982〕では複合口縁の下端に棒・竹管・指頭様の圧痕を加える等の相違がみられる。今後、地域・時期差などの検討を行ってきたい。

なお共存関係ははっきりしないが中期の播磨土器との検出例や、飯坂遺跡では弥生後期の方形周溝墓盛土下の黒褐色土中より天王山系統の土器が出土しており、時期は中期(畿内第4様式)と考えたい。

③ 後期の土器

今回の調査では多くの弥生後期土器の出土があり、時期幅をもつ。X25~27Y35~38区では甕A₂・B・E、壺C₁の土器の集まりがあり、後期後半の塚崎II式〔吉岡 1976〕の時期に当る。その他の土器は、壺・甕・鉢の口縁部形態から南太閤山遺跡のI・II期〔関他 1984〕の中間、法仏I式〔谷内尾 1984〕・猪橋遺跡例〔浜岡 1968〕の時期にはほぼ該当する。この中でも図77・92・102等の土器は古い様相であり、甕A₂は新しい様相を示す。また他地域の併行関係を知る資料としては、近江系の特徴をもつ甕Fがあり、畿内の西の辻D式や上六万寺併行期の甕〔中西 1979〕に類似する。またNo21遺跡では畿内系クタク調整甕Gが出土した。この甕の全国的な顕著な波及時期は、庄内式以降とされ〔寺沢 1980〕、石川県では約10遺跡での検出がなされ、主に月影式期以降に多くなるようである。県内では大境洞窟の例が知られる。また新潟県内越遺跡では、後期末の土器と共に北方系の後北C₂式の出土〔横山他 1983〕があり、分布の南限〔佐藤 1976〕に位置し、天王山系統の土器との関連で今後注目される。

射水丘陵及び周辺の遺跡の増加は、弥生中期以降みられ、No21遺跡が周辺遺跡の採土跡の可能性は、今後各遺跡出土土器の胎土及び粘土の分析を行えば、証明されるであろう。なお、谷部調査の必要性を痛感した。(上野)

註① 後期縄文をもつ東日本の土器

で、大平山系統の土器とは明らかに異なる。県東 410 畝田の土器

註② 歴史の写真によれば長野県の土器を含み、特徴になる遺跡であり、これから諸問題を解決できそうである。

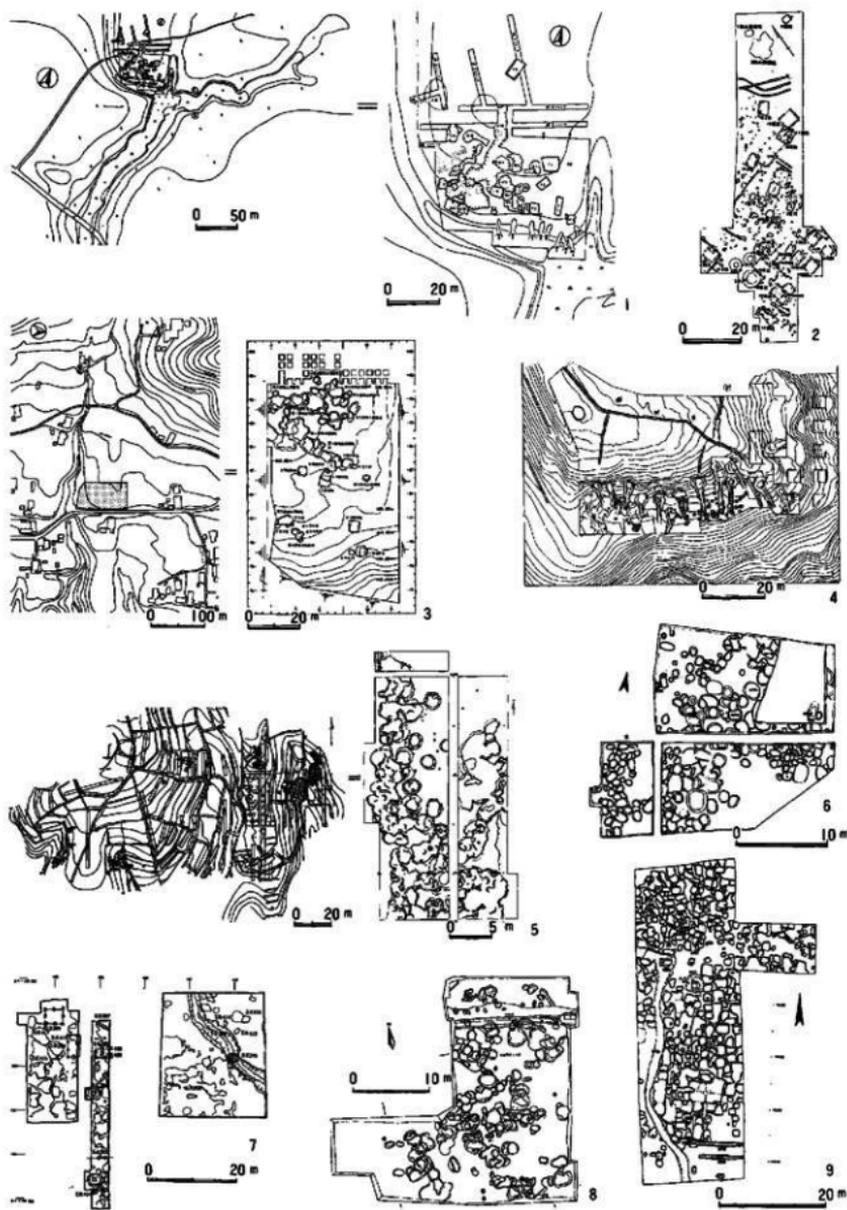
註③ 富山県史考六冊 443 頁 5 区の上巻。橋本正氏の指摘による。

なお、弥生土器については、前橋氏及び関氏を介し中村五郎氏より、有益な教示・助言を得たが、充分いかしきれなかった。

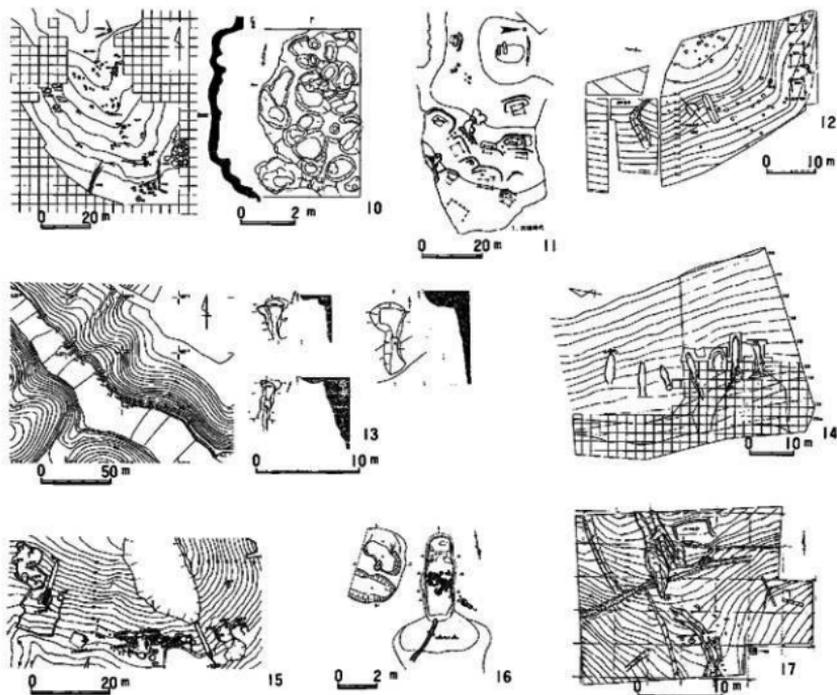


第27図 No.21遺跡と関連遺跡

弥生時代中期一宮遺跡初期の(昭和36年5万分の1地図より作成)



第28図 主な採土穴



第20図 主な採土穴

No.	遺跡名	所在地	時代	主な遺構	文献
1	馬塚遺跡	茨城県勝田市の野	古墳時代(6世紀中葉~7世紀前半)	A地区(粘土採掘層1以上、埋藏室2, 埋藏室1, 住居址2, 埋藏室1以上) B地区(粘土採掘層1以上、埋藏室2, 埋藏室1, 埋藏室1) C地区(埋藏室2, 埋藏室1)	大塚他 1976
2	将監塚遺跡	埼玉県本庄市大字子生和149番	奈良・平安時代?	C地区(粘土採掘層2, その他住居跡等)	今井他 1983
3	藤田遺跡	群馬県利根郡野井町	平安時代	粘土採掘層11群, 住居址8(西接する藤田遺跡では11, 横出) 月夜野等址群がその1kmに位置する	原他 1983
4	多摩ニュータウン6号地	東京都八王子市河辺2-290	平安時代後葉(10世紀後半~11世紀)	粘土採掘層2, その他粘土層54, 埋藏するNo.144遺跡の上層敷の土層と重複する	舟橋他 1982
5	島田6号地	静岡県島田市中西町東宿	平安時代(11世紀前半~12世紀後半)	陶土採掘ピット状遺構群, 竈址11, 工房址(炭指古窯址群)	山村他 1974
6	西村遺跡	静岡県静岡市清水区西村	平安時代(11世紀後半)	3地区に上坑(粘土採掘層)が確認される, このうち黄色古窯群と呼称	広瀬他 1982
7	平塚京西遺跡	東京都平塚市山手町九条町字山本	中世	不定形土層(粘土採取を目的とした土取り?)	金子他 1982
8	京大藤子部遺跡	東京都藤子部	平安時代(11世紀後半~12世紀)	不定形ピット群(10個前後まわって1群形成, 全体で7群)	泉他 1977
9	多摩ニュータウン7号地	東京都八王子市河辺2-290	近世以降	山砂採掘層(埋藏層で直径12m以上, 坑内には大, 小約30基程の上坑を確認)	森下他 1981
10	多摩ニュータウン8号地	東京都八王子市河辺2-290	近世以降	山砂採掘層(埋藏層で直径12m以上, 坑内には大, 小約30基程の上坑を確認)	森下他 1981
11	4村遺跡	山梨県北都賀郡北都賀町大字四村	古墳時代(6世紀末~7世紀)	採土穴(第7, 8, 9, 14, 30, 31号穴)住居29	上野他 1982
12	本片子遺跡	富山県高田町本片子	古墳時代後半以降	穴遺構(土を採取), 竈1(瓦陶器), 埋立柱遺物3	藤部他 1982
13	島崎ニュータウン6号地	千葉県印旛郡栄町島崎	古墳時代(7世紀後半)	横穴状遺構12, 砂採取か?	柿沼他 1982
14	八咫宮遺跡	埼玉県川口市大宮区八咫宮	平安時代(9世紀前半~中葉)	粘土採掘層1, 竈6(東金子窯跡群)	塚野他1981, 84
15	小杉遺跡 No.16遺跡	富山県射水郡大門町字新久	奈良時代(8世紀前半)	①昭和54年調査2号窯跡の西側に採土穴3(3~6号穴) ②昭和58年調査1号窯跡の東側に採土穴(37~39号穴)	上野他 1980 上野他 1984
16	正家1号窯	岐阜県岐阜市南島町正家	平安時代(11世紀前半)	楕円形横穴ピット(1号窯の西側に位置)正家古窯跡群	齋藤 1983
17	旗指古窯跡	静岡県島田市の旗指	平安時代	S, D-1, 7, 8, 9, 10-陶土を採掘した跡とも考えられる, (No.5と同遺跡)	渋谷他 1983

表3 主な採土穴一覧

(3) 木製品について

今回の調査で得られた木製品の総数は122点で、成品と見做しうるのは43点である。前述のように、穴群最下層から弥生後期の土器に伴って出土したもので、掘削具と容器が大半を占める。このような木製品の種類は、遺跡の性格を規定するとは言えないものの、一つの傾向を示唆するものであることは言うに及ばない。したがって、出土した製品についてその種類、出土状況などについて検討を加えるべきであるが、現段階では木製品から遺跡の性格について論ずることは避けたい。

ここでは、当遺跡出土木製品の中に鋸の未製品と思われれるものや、良好な状態で出土した桶などがあることから、それらについて詳述し、若干の私見を述べ、まとめたい。

第23図3に示したものは、長柄鋸の未製品と考えられるもので、弥生時代のものとしては、全国的にも例が少ないものである。着柄の鋸・鋸では、昭和12年に調査された奈良県唐古遺跡で未製品が見えられ、その製作過程について考察が加えられ、以後、それを補強する資料が増加している。しかしながら、長柄鋸については、資料の不足もあって具体的な製作過程について触れた論考はない。弥生時代の木製農具について、その製作上の検討を行なった根木修氏の論考〔根木 1976〕でも長柄鋸については、具体的記述はない。しかし根木氏の考察は、木器全般の製作の検討を通じて木製農具製作の再検討をおこない、木製農具の意義について論証していることは、高く評価できる。ここでは、3の資料により製作過程の復原的考察を試みる。

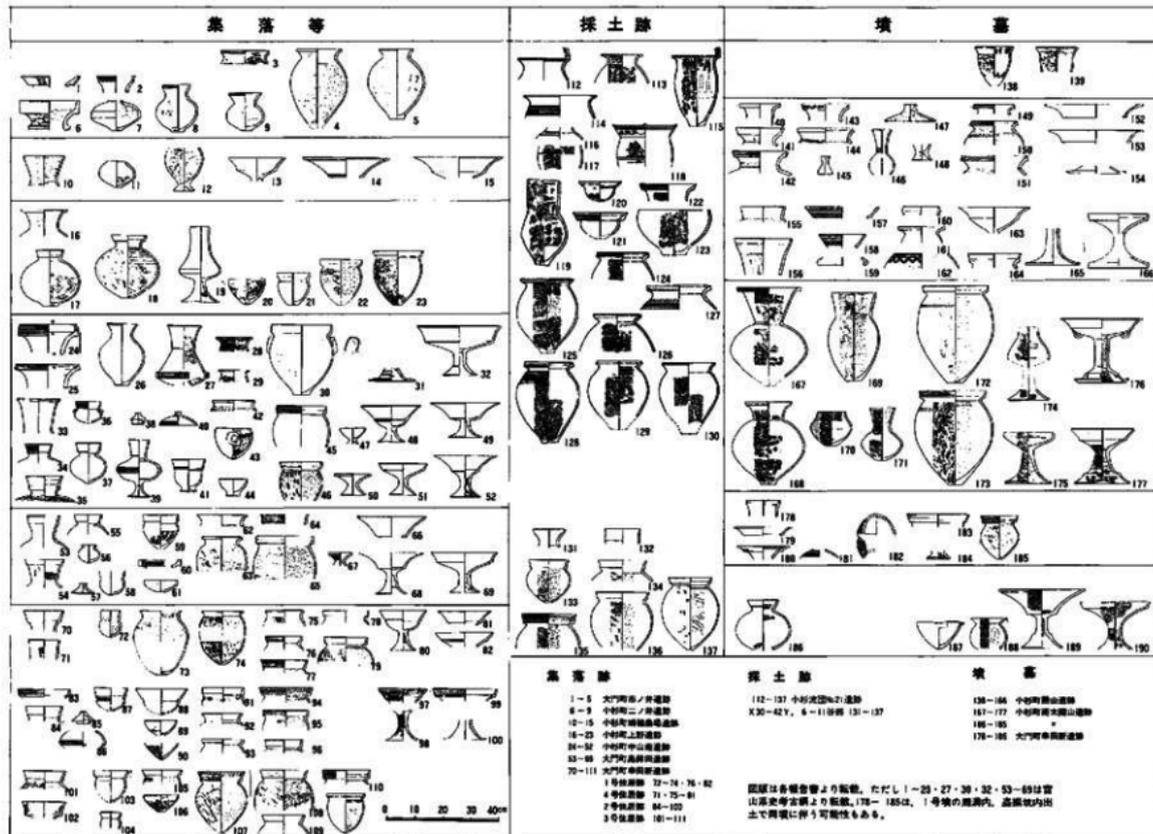
3の資料は、屑の部分明らかに折損しており、その折損部に何らの調整も加えられないことから、柄と身が一木で作られる長柄鋸の未製品という前提に立つ。製作は原木の入手と堅木取りの板材製作に始まる。板材は割りと切断の手法によって、成品となるべき長さや幅に整える。厚さは概ね成品の倍以上である。次に身と柄の形を兩りによって大まかに整え、身の側面からクサビを打ち込み半載する。最後に全体の形を整えて完成させたと考える。この方法によれば、成品は同時に二つ得られる訳で、当遺跡の木製品は、まさに半載の段階を示すものである。

この推察は、成品の観察によっても裏付けられる。すなわち、第23図2及び4にも見られるように、片面ははいねいな調整が行なわれるのに対し、他の一面は、粗雑であり、削り面すら残す。柄もその断面が半円形になるのが多いのも、半載による結果と考える。このような製作技術は、縄文時代にその基盤があり、特別な技法を証明するものではないが、一つの事例を紹介し、大方の御叱正を乞うものである。

次に桶の胴と底板の問題について述べる。弥生時代の桶については、久々忠義氏が本県江上A遺跡出土品の考察で一木作りの可能性を指摘した〔久々 1984〕。それは石川県金沢市西念・南新保遺跡出土の超大型桶形木器も一木作りであることから実証される。そして底板の結合については、宮本哲郎氏が西念・南新保出土品の詳細な観察から次のように考察される。つまり「底板の径が小さい方を上にして底から入れる。そうすると胴の板が最も厚くなる場所で止まる。しかし、このままでは底板が抜け落ちるので、底板の下面に接するように目釘を打ち、底板を支える」というのである〔宮本 1983〕。また、底板を支えるのには、柄木なども使用されたと考えている。

ところで、当遺跡からは第25図21に示すような、底板が結合した桶が出土している。この場合は明らかに口縁部の方から底板を入れ、胴部の肥厚部分、いわゆる受け部に結合されるのである。この時底板はその断面において逆台形になり、宮本氏が指摘するものとは逆になる。宮本氏の見解を否定するものではないが、胴部の内面に共通して見られる肥厚部分を底板の受け部と考え、底板は口縁部の方から入れたと考えた方が、容器としての耐久性に優れていると考える。もっとも、西念・南新保遺跡出土品が底板の磨滅により、補強あるいは補修されたと考えれば、矛盾はない。木製容器は、土器と比べれば、その量産の面では劣るものの、木の持つ特性である軽軟さ、強靱さにおいて卓越するものがあり、補修や転用が頻繁に行なわれたと想像するのに難くない。

(関)



第30図 No.21遺跡と関連遺跡出土の遺物 弥生時代中期～古墳時代初め

参 考 文 献

- ア 荒木新行・菅岡康雄 1970 『金沢市秋田弥生遺跡の調査予報』石川考古学研究会会誌 第13号
新井利郎 1973 『縄文土器の技術』
- イ 奥 邦良他 1977 『富山県道第1533の発掘調査』『京都大学構内遺跡調査研究年報一昭和51年度一』京都大学
池野正男・山本正敏・神保孝彦 1979 『富山県小杉町流道遺跡(富山県道第252)遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
今井 定雄 1982 『新編富山道跡』『富山県文化財調査報告書第30号』
- ウ 上野 幸 1972 『弥生時代前・古式土器跡』『富山県史』考古編
上野 幸 1975 『高岡市河川遺跡』大槻 5号 富山考古学会
上野 幸・池野正男 1980 『富山県小杉町・大門町小杉流道遺跡(富山県道第2次緊急発掘調査概要)』富山県教育委員会
上野 幸・野野 隆・池野正男・富田達一・久々忠義 1982 『富山県小杉町・大門町小杉流道遺跡(富山県道第3・4次緊急発掘調査概要)』富山県教育委員会
上野 幸・嶋本正敏他 1983 『富山県小杉町・大門町小杉流道遺跡(富山県道第5次緊急発掘調査概要)』富山県教育委員会
上野 幸・嶋本正敏・山本正敏・神保孝彦・藤原 隆 1984 『富山県小杉町・大門町小杉流道遺跡(富山県道第6次緊急発掘調査概要)』富山県教育委員会
- カ 大木直枝・中村五郎 1970 『山梨第2式土器について』信濃第22巻第9号 信濃史学会
大家初重・小林三郎 1976 『実城麻呂塚における地輪製作法』『明治大学文学部研究報告』考古学 第6巻 明治大学
- キ 金子裕之他 1982 『平城京西市部』奈良県教育委員会
橋田修平他 1982 『No.6地点(管吹古)の調査』『龍岡寺ニュータウン遺跡群』龍岡寺ニュータウン遺跡調査会
藤田 昭他 1982 『藤子子遺跡・木取古墳』富山県教育委員会
岸本雅敏 1982 『新編富山道跡』『北陸自動車道遺跡調査報告一上市町土器・石器編一』上市町教育委員会
岸本雅敏 1984 『No.21遺跡の調査報告について』『富山県小杉町・大門町小杉流道遺跡(富山県道第6次緊急発掘調査概要)』富山県教育委員会
ク 久々忠義 1982 『江上A遺跡』『北陸自動車道遺跡調査報告一上市町土器・石器編一』上市町教育委員会
久々忠義 1984 『江上A遺跡』『北陸自動車道遺跡調査報告一上市町土器・石器編(本文)一』上市町教育委員会
小林修造・太本雅雄 1943 『木器類及び植物製品』『大和考古学』
小島俊彰・嶋本 正・嶋田富士夫 1971 『小杉町・山南遺跡調査報告書』富山県教育委員会
小林雅雄 1977 『縄文土器』日本原始美術大系1
- ク 佐原 真 1959 『弥生式土器製作に関する二・三の考察』私たちの考古学 20号 考古学研究会
佐原 真 1968 『土器製作技術の変遷』『新書』読売新聞社
佐藤信行 1976 『東北地方の縄文式文化』『東北考古学の諸問題』
- ク 藤原正福 1983 『正家1号縄文発掘調査報告書』恵那市教育委員会
坂崎芳一他 1981 『福島県八坂町遺跡の第2次調査』考古学ジャーナル No.168
坂崎芳一編 1984 『考古学調査報告書』富山県教育委員会
河津 通他 1982 『No.2遺跡』『多摩ニュータウン遺跡一昭和55年度一(第1分冊)』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第2集
河津通彦 1982 『止印新遺跡』『北陸自動車道遺跡調査報告一上市町土器・石器編一』上市町教育委員会
シ 渋谷昌彦他 1983 『新編富山道跡』富山県教育委員会
セ 関 雅之 1970 『郡市計画街路七美・大岡山・高岡内周防跡群発掘調査報告(2)』富山県教育委員会
関 雅之 1970 『新海津における縄文土器の問題』信濃第22巻第4号 信濃史学会
ツ 田辺昭三 1966 『阿倍倉宮跡群1』平安学道
ツ 坪井清史 1953 『福島県天王山遺跡の弥生式土器』史林第36巻第1号 史学研究会
ト 中村 廉 1979 『奈良市六条山遺跡』『奈良県文化財調査報告』第34集
ト 富山県教育委員会 1977 『昭和51年度富山県道跡分布調査報告書』
ナ 中村五郎 1976 『東北地方南部の弥生式土器群』『東北考古学の諸問題』
中村五郎 1983 『東北・中南部と新編』『三世紀の考古学』下巻
中西常雄 1979 『北大津の竪穴』
中山修安 1981 『串田新遺跡群』大門町教育委員会
- ニ 新潟県 1983 『新潟県史』史料編1
- ハ 嶋本 雅 1976 『福島県神倉の発掘』『考古学研究』第22巻第4号 考古学研究会
嶋本雅夫 1968 『石川縣小杉町日市地方遺跡の調査』石川考古学研究会会誌 第9号
嶋本雅夫 1973 『火輪遺跡』『評言史』古代編
嶋本雅夫 1975 『入門編』『弥生土器一北陸一』考古学ジャーナルNo.106, 107, 109, 111
嶋本 正 1970 『國山遺跡一小杉町國山遺跡緊急発掘調査報告書』富山県教育委員会
嶋本 正 1974 『小杉町上野遺跡一記録年表一』富山県教育委員会
嶋本 正・柳井 隆・池野正男・濱井重洋 1978 『富山県立山町ツッ巻遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
嶋本 正・神保孝彦 1973 『富山県大門町串田新遺跡発掘調査概要』富山県教育委員会
嶋本 正・上野 幸・山本正敏・池野正男・松本幸治 1979 『富山県魚津市佐佐木遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
嶋本正孝 1982 『富山県の土器群研究史概観』富山県考古資料館紀要第1号
浜岡賢太郎・上原甲子郎・磯崎正彦 1968 『北陸地方I, II, III』『弥生式土器』本編2
嶋本 雅他 1983 『新編富山道跡』富山県教育委員会
- ヒ 広瀬常雄他 1982 『西村遺跡群』富山県教育委員会
- フ 福島県 1964 『福島県史』第6巻 考古資料
福島県 1968 『福島県史』第7巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第8巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第9巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第10巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第11巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第12巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第13巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第14巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第15巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第16巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第17巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第18巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第19巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第20巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第21巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第22巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第23巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第24巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第25巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第26巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第27巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第28巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第29巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第30巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第31巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第32巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第33巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第34巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第35巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第36巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第37巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第38巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第39巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第40巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第41巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第42巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第43巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第44巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第45巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第46巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第47巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第48巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第49巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第50巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第51巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第52巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第53巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第54巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第55巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第56巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第57巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第58巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第59巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第60巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第61巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第62巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第63巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第64巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第65巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第66巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第67巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第68巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第69巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第70巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第71巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第72巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第73巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第74巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第75巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第76巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第77巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第78巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第79巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第80巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第81巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第82巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第83巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第84巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第85巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第86巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第87巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第88巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第89巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第90巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第91巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第92巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第93巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第94巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第95巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第96巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第97巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第98巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第99巻 考古資料
福島県 1973 『福島県史』第100巻 考古資料
- メ 宮本智郎 1977 『金沢市寺中遺跡一II一』『考古学』第11号
宮本智郎 1983 『第4家遺跡』『金沢市西金沢・新保遺跡』金沢市教育委員会
宮田達一 1982 『江上B遺跡』『北陸自動車道遺跡調査報告一上市町土器・石器編一』上市町教育委員会
嶋本正孝他 1981 『平城京右京区西一坊十五坪発掘調査報告』『奈良市遺跡文化財調査報告書一昭和55年度一』奈良県教育委員会
谷内茂吉・中島茂一・用中孝典・鈴木英夫・山根康典 1964 『鹿野モリガワ遺跡一鹿野海田遺跡文化財調査報告書』石川県立埋蔵文化財センター
- ヤ 山村 定他 1974 『国道1号線バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告』富山県教育委員会
- ユ 橋田修平・嶋本 正・山本正敏 1975 『金沢市戸木B遺跡調査報告書』富山県教育委員会
橋田修平 1983 『富山県小杉町流道遺跡(富山県道第252)遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
ヨ 吉岡謙二 1957 『富山県史』第1巻 考古資料
吉岡謙二 1976 『富山県史』第2巻 考古資料
吉岡謙二 1977 『富山県史』第3巻 考古資料
吉岡謙二 1978 『富山県史』第4巻 考古資料
吉岡謙二 1979 『富山県史』第5巻 考古資料
吉岡謙二 1980 『富山県史』第6巻 考古資料
吉岡謙二 1981 『富山県史』第7巻 考古資料
吉岡謙二 1982 『富山県史』第8巻 考古資料
吉岡謙二 1983 『富山県史』第9巻 考古資料
吉岡謙二 1984 『富山県史』第10巻 考古資料
吉岡謙二 1985 『富山県史』第11巻 考古資料
吉岡謙二 1986 『富山県史』第12巻 考古資料
吉岡謙二 1987 『富山県史』第13巻 考古資料
吉岡謙二 1988 『富山県史』第14巻 考古資料
吉岡謙二 1989 『富山県史』第15巻 考古資料
吉岡謙二 1990 『富山県史』第16巻 考古資料
吉岡謙二 1991 『富山県史』第17巻 考古資料
吉岡謙二 1992 『富山県史』第18巻 考古資料
吉岡謙二 1993 『富山県史』第19巻 考古資料
吉岡謙二 1994 『富山県史』第20巻 考古資料
吉岡謙二 1995 『富山県史』第21巻 考古資料
吉岡謙二 1996 『富山県史』第22巻 考古資料
吉岡謙二 1997 『富山県史』第23巻 考古資料
吉岡謙二 1998 『富山県史』第24巻 考古資料
吉岡謙二 1999 『富山県史』第25巻 考古資料
吉岡謙二 2000 『富山県史』第26巻 考古資料
吉岡謙二 2001 『富山県史』第27巻 考古資料
吉岡謙二 2002 『富山県史』第28巻 考古資料
吉岡謙二 2003 『富山県史』第29巻 考古資料
吉岡謙二 2004 『富山県史』第30巻 考古資料
吉岡謙二 2005 『富山県史』第31巻 考古資料
吉岡謙二 2006 『富山県史』第32巻 考古資料
吉岡謙二 2007 『富山県史』第33巻 考古資料
吉岡謙二 2008 『富山県史』第34巻 考古資料
吉岡謙二 2009 『富山県史』第35巻 考古資料
吉岡謙二 2010 『富山県史』第36巻 考古資料
吉岡謙二 2011 『富山県史』第37巻 考古資料
吉岡謙二 2012 『富山県史』第38巻 考古資料
吉岡謙二 2013 『富山県史』第39巻 考古資料
吉岡謙二 2014 『富山県史』第40巻 考古資料
吉岡謙二 2015 『富山県史』第41巻 考古資料
吉岡謙二 2016 『富山県史』第42巻 考古資料
吉岡謙二 2017 『富山県史』第43巻 考古資料
吉岡謙二 2018 『富山県史』第44巻 考古資料
吉岡謙二 2019 『富山県史』第45巻 考古資料
吉岡謙二 2020 『富山県史』第46巻 考古資料
吉岡謙二 2021 『富山県史』第47巻 考古資料
吉岡謙二 2022 『富山県史』第48巻 考古資料
吉岡謙二 2023 『富山県史』第49巻 考古資料
吉岡謙二 2024 『富山県史』第50巻 考古資料

1. 発掘区全景
南から



2. 発掘区全景
北から



3. 採土穴
X23~26
Y32~39
西から



4. 採土穴
X26~28
Y31~39
西から





1. 遺構全景
北から



2. 採土穴
X38~40
Y30~34
北から

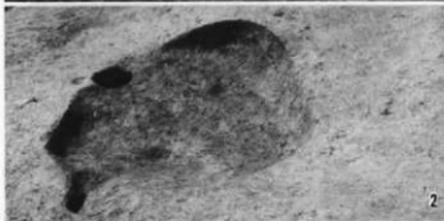


3. 採土穴
X24~26
Y35~39
西から

1. 遺構検出面
での採土穴
X23~28
Y32~39
西より



2. 第 121号穴
3. 第 122号穴



遺物出土状態

4. 土器の出土
X39 Y32



5. 同上
X36 Y31

6. 木製品の出土
X32 Y30



7. 同上
X28 Y37

8. 同上
X27 Y37



9. 土器の出土
X39 Y32

10. 木製品の出土
X27 Y37

11. 同上
X27 Y37

12. 同上
X25 Y32





1
52



2
78



3
89



4
116

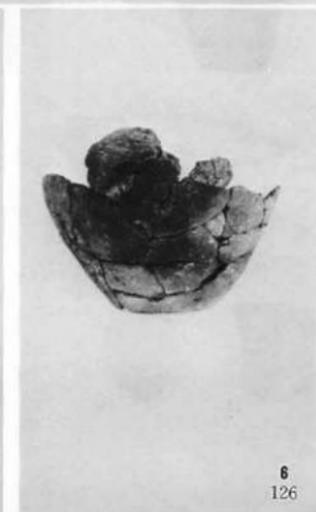


5
120

約 1 : 3

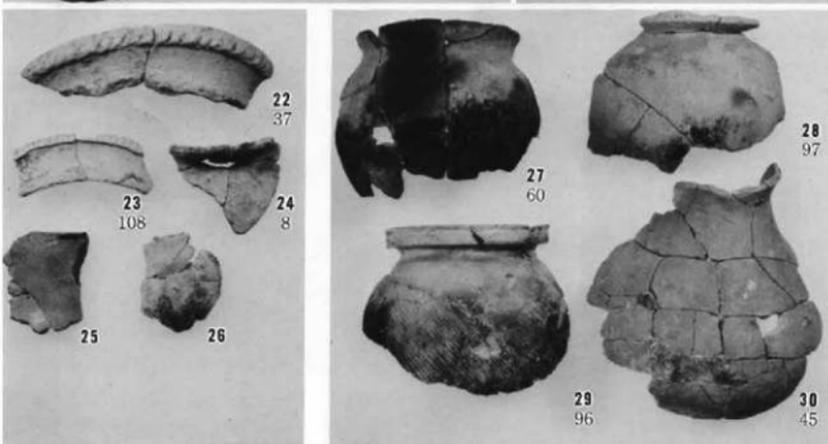
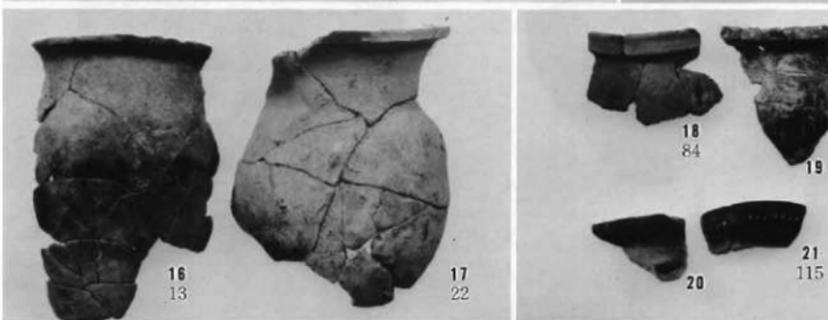
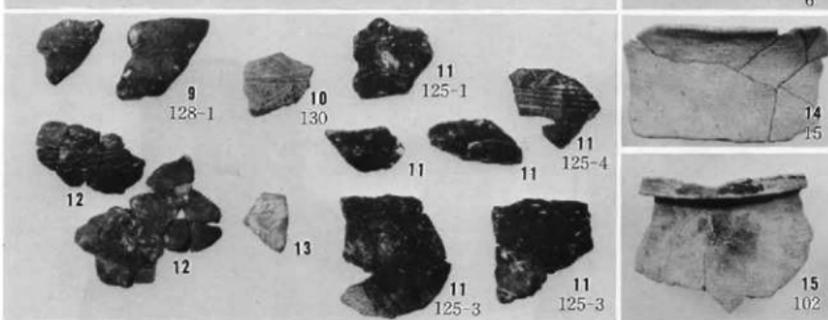
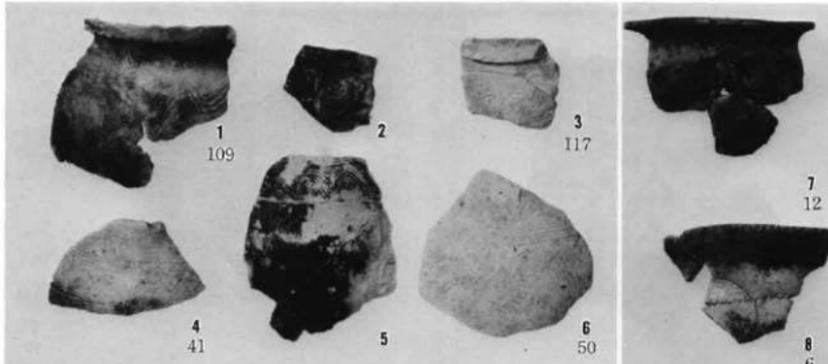
図版第 4

出土遺物

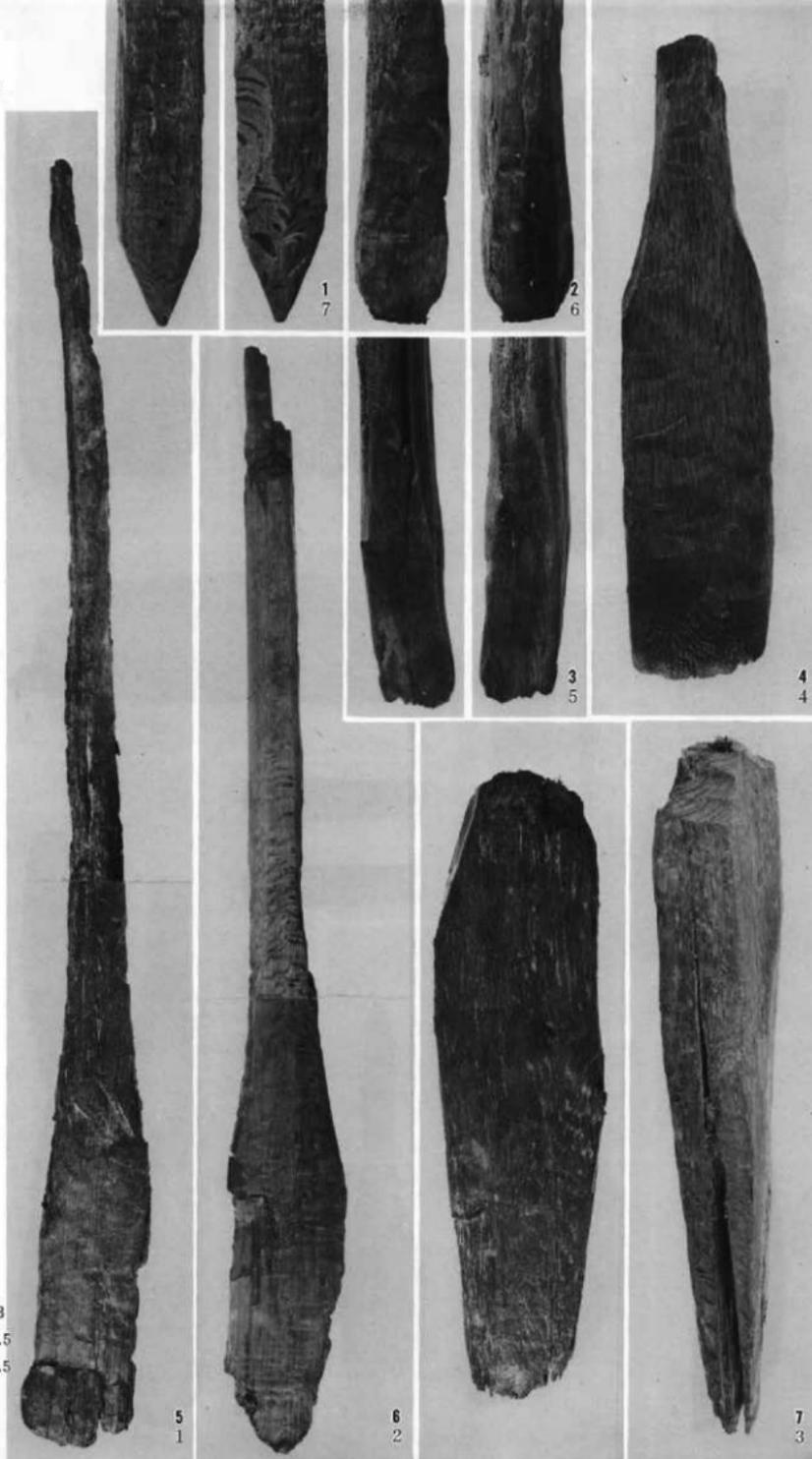


約1:3

図版第5



出土遺物



1-4 約1:3
5-6 約1:5.5
7 約1:4.5

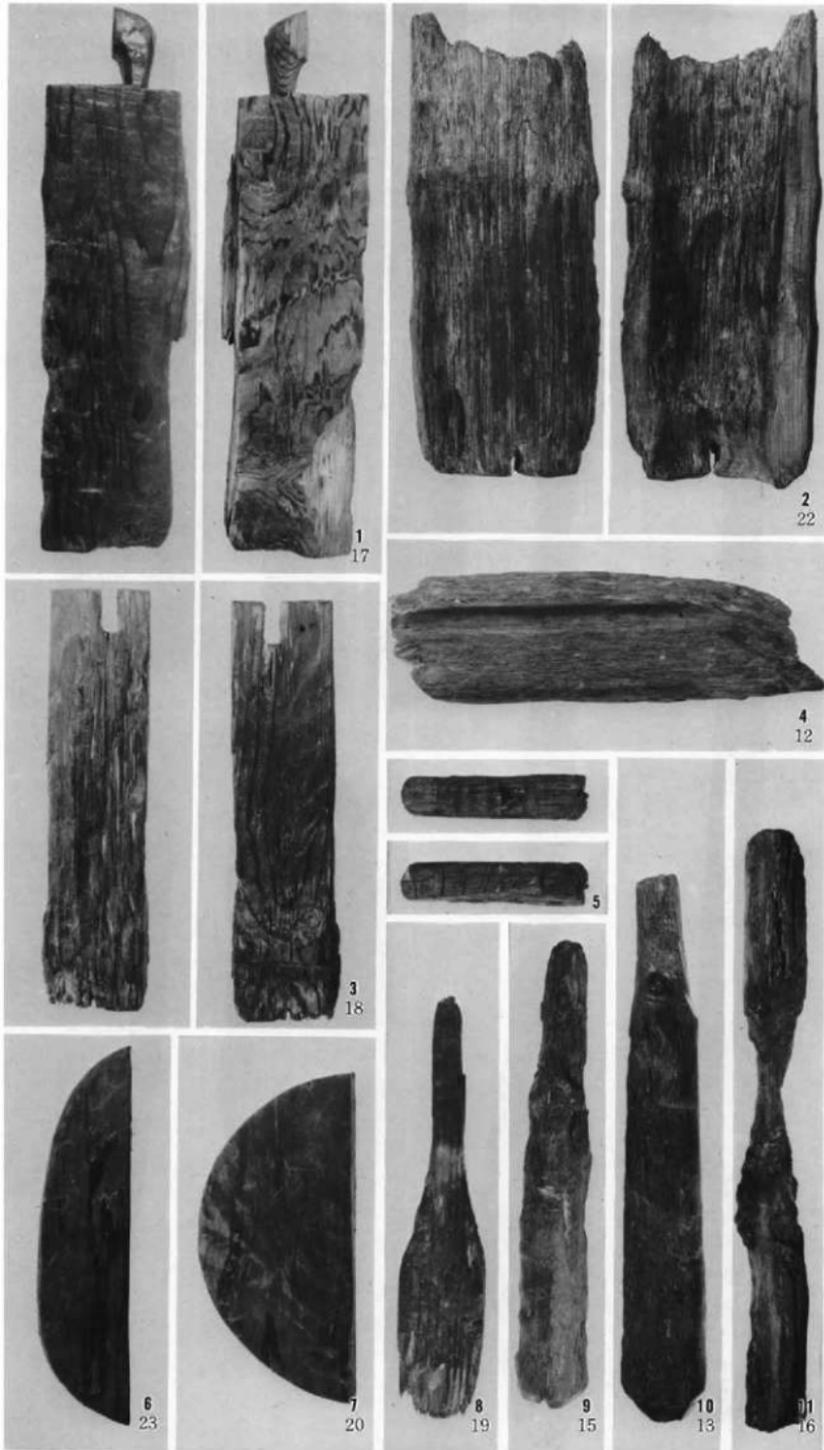
図版第 7

5
1

6
2

7
3

出土遺物



1~10 約1:3

11 約1:6

図版第 8

小杉流通業務団地内遺跡群発掘調査参加者

丸山久一・前田春作・吉岡信雄・水上利雄・宿原重信・木原 茂・松永信治郎・土佐重雄・堀 勇一・寺口信吉・高田保通・長谷義雄・山崎政廣・山崎 弘・窪池義信・広林孝三・浅井長作・宇多外吉・古川保忠・山崎信吉・林 市松・本松義雄・平川正雄・林 清則・前坪重雄・南 義政・清水友博・黒川愛子・黒田信子・原のり子・山崎ふみ子・山崎弘子・西野浪子・北川愛子・光池はる・光池志信・光池ヨシミ・水井加里枝・南さら代・綿谷とし子・近藤美栄子・坂上晃子・野村敦子・徳井 昭・山口なみ子・福田芳子・山ドアヤ子・山下ナミ・小倉道子・御後利子・京角外枝・京角とみ子・山屋なみ子・宮林 都・宮林俊子・上谷アキ・山下金子・山下なつ子・白石邦子・宮内百合子・宿屋とき・下条菊枝・野村美春・針原美千代・小西イミ子・黒田せつ・久野静枝・窪池ソノエ・篠原ちよ子・若崎百合子・沢 みさ・木村知誠子・三屋登美子・竹添照子・炭谷フミ子・壺田きのあ・市井くに子・宮本房子・霧上すみ子・久野かのい・西野としい・青木花枝・三鍋愛子・橋本律子・広川ミキイ・松原光枝・本松 操・林 陽子・沢田ヨシ子・大野スズイ・堀田キヨシ・林キクエ・古川あや子・高城富美子・田中栄子・三輪光子・高城登志子（順不同・敬称略）

小杉流通業務団地内遺跡群出土遺物・資料整理参加者

清水友博・宮田佐和子・杉崎容子・土田節子・山口チズ子・坪川和子・土田ユキ子・安部利子・久野静枝

富山県小杉町・大門町

小杉流通業務団地内遺跡群

第7次緊急発掘調査概要

発行日 昭和60年3月30日

編集 富山県埋蔵文化財センター

発行 富山県教育委員会

印刷 北日本印刷株式会社

